

ortofon
accuracy in sound

ortofon
cartridges



www.ortofon.jp

オルトフォンジャパン株式会社

〒113-0033 東京都文京区本郷2-6-7 TEL:03-3818-5243 FAX:03-3818-5899

写真や図版の色彩は印刷の関係で実際とは若干異なる場合がございます。
また、規格・デザイン・価格の一部を予告なく変更することがありますのでご了承ください。
本カタログに記載する著作は、すべてオルトフォンジャパン株式会社に帰属します。
2025年10月作成 Ver.9

100年を超える、伝統と革新

世界中のユーザーに最高品質の製品を提供するために、革新的な技術を追求し続けること一世紀。二人の技術者が世界で初めて映画用トーンキーシステムを開発したことを礎とし、業務用音響機器の開発から歩みを始めたオルトフォンは、アナログレコード用のカートリッジ、トーンアーム、トランス、そしてケーブルからイヤフォンまで、自らの保有する技術を絶え間なく発展させ、多くの魅力的な製品を創造してきました。そして、“原音を忠実かつ正確に再現する”という哲学は、今までも、これからも、変わりません。オルトフォンは、究極のアナログサウンドを求め続けます。



1918



高性能なモノラルMCカートリッジ「Type-C」

- 1918.10.09 アクセル・ピーターセン(1887-1971)とアーノルド・ポールセン(1889-1952)がエレクトロカル・フォノフィルムズ・カンパニーA/Sを設立
- 1923.10.12 コペンハーゲンのパレスシアターにおいて、屋内録音された最初のトーンキーフィルムが公開される
- 1924.3 世界初の屋外録音トーンキーフィルムが製作される
- 1938-1944 この間、マイクロフォン、オシロスコープ、光学機器などを開発
- 1946 オルトフォン最初のモノラルカッターヘッドを開発、社名を「フォノフィルム・インダストリーA/S」に変更
- 1947 「フォノフィルム・インダストリーA/S」傘下の企業として「オルトフォン A/S」を設立
- 1948 自社設計のカッターヘッドに合った、高性能なモノラルMCカートリッジを世界で最初に設計

1950



世界で最初の高性能なステレオカートリッジSPU(1957-1959)

～ステレオ時代の幕開けとSPUの誕生～

- 1953 オルトフォン初のトーンアームA212を製造
- 1957 ステレオ用カッターヘッドを開発
- 1957-1959 後に伝説となるステレオMCカートリッジ、SPU(Stereo Pick Up)を開発
- 1960 真空管式ステレオアンプType 601(出力15W×2)を発売
- 1960年代半ば S-15シリーズを発表
- 1969 M-15を発表
- 1970 生産部門・設備をデンマーク南部ナクスコウの新工場に移転させる
- 1976 AS-212 トーンアーム、MC カートリッジ用のヘッドアンプMCA-76を発表

～軽量化と利便性に対するオルトフォンの回答、Concorde～

- 1979 Concorde30、Concorde20、MC20MkII、LM30(H)、LM20(H)、SME30Hを発表
カートリッジ・ヘッドシェル一体型のConcordeがデンマーク工業デザイン賞を受賞



ステレオ用カッターヘッド DSS661



デンマーク南部ナクスコウの本社工場

1980

- 1980 VMS10EMkII、VMS 30MkII、Concorde STDを発表
- 1981 LM10、LM15、SMG/SKG 212MkIIトーンアーム、特別版SPUのSPU Gold GE、AE、T-30トランスを発表
- 1982 MC2000、T2000 MC昇圧トランス、MC 10 Super、MC 100、MC 200 Universal、TMC200およびTM20Hを発表

～世界に広がるortofon～ 創業65周年を迎えて

- 1983 米国子会社のOrtofon Inc. を設立。オーディオ機器生産現場用の測定器P400を発表
- 1984 Concorde Pro/OM Proを発表。OMP10、20、30 およびMCP 100 Superを含むOMPシリーズを発表
- 1986 ダイヤモンド・スタイラスチップの製造を開始。MC 30 Super、X1-MC、X3-MCを発表
- 1987 東京に日本子会社のOrtofon Japan Co.,Ltd. 設立。SPU Classic G/GE、A/AEを発表

～世界初採用、99.99999%(7N)の高純度銅～ 創業70周年

- 1988 MC 70 Anniversary、業務用/ハイパーアンプPPA 600、MC 30 SuperII、MC 20 SuperII、MC 10 SuperII、HMC 20、HMC 10を発表
- 1989 SPU Reference G/A、SPU Mono G/A、HMC 30、T20 MkII、RMG-309 Limited、RMG-212 Limited など多くの新製品を発表。Night Clubシリーズを発表



MC 70 Anniversary(1988)



SPU mono A(1989)

1990



ロバート・グッドマンセン氏(写真右)



MC Jubilee(1998)

- 1990 世界初の99,99999%(7-Nine,7N)の高純度銅を用いたオーディオケーブルを発表
- 1992 「ミスター・SPU」ロバート・グッドマンセン氏のオルトフォン在職50周年と文化功労賞授与を記念し、SPU Meister GE/AE発表
- 1993 フラッグシップモデルのMC 7500を発表
- 1995 MC Rohmann、Concorde DJ Sを発表
- 1996 SPU Meister Silver GE/AE を発表。CG/CA25 Di、CG/CA65 Diが復刻

～史上最高のMMカートリッジ、2Mシリーズ誕生～ 創業80周年へ

- 1998 オルトフォン創立80周年を記念し、SPU Royal G/A/NとMC Jubileeを発表
- 1999 Concorde Scratch/OM Scratchを発表

2000



Concorde Q bert(2005)

- 2000 MC Kontrapunkt a、Kontrapunkt bを発表
- 2003 SPU 85 Anniversary、Concorde Elektro/OM Elektro、MC Kontrapunkt c、MC Kontrapunkt hを発表
- 2004 MC W シリーズ発表
- 2005 DJ Q bert の監修の下、Concorde Q bert/OM Q bertを発表。SPU Synergy GEを発表
- 2007 2M シリーズ、AS-212/309S、RS-212/309Dを発表

～現代技術の結晶、送り出された革新のMC Anna～ 創業90周年へ

- 2008 MC Windfeld、MC Cadenzaシリーズ、SPU 90 Anniversary、MC A90、ST-80 MC昇圧トランスを発表

2010



MC Xpression(2011)

- 2010 S-120、TA-110を発表
- 2011 新機軸の磁気回路を使用した空芯カートリッジ MC Annaを発表。MC Xpression、TA-210、LH-10000を発表
- 2012 2M Mono と2M 78を発表

～具現化された理想・「Reference Series」が拓く新時代～ 創業95周年へ

- 2013 2M PnP シリーズ、MC Q シリーズを発表。補聴器産業に向けた骨伝導ユニットの製造を開始
- 2014 SPU 95 Anniversaryを発表
- 2015 MC A95 を発表
DTI(Danish Technological Institute)award の“3D Print Series Production Prize 2015”を受賞
デンマーク首相ヘレト・ニング＝シュミット氏(当時)が工場を視察
- 2016 医療機器用プラスチック・ゴム・金属部品の製造、骨伝導ユニットの製造における品質マネジメントについて、ISO 13485規格の認証取得。SPU#1SおよびSPU#1E、RSG-309トーンアーム、MCトランスST-7、ヘッドシェルLH-4000、精密デジタル針圧計DS-3、Ortofon TEST RECORDを発表。MC Q30がMC Q30Sとなる
- 2017 インターコネクトケーブルReference Series発表。MC Windfeld Ti、SPU Wood Aを発表

～創業から1世紀を記念した特別モデル、Centuryシリーズ誕生～ オルトフォン創業100周年へ

- 2018 オルトフォン創立100周年を記念してThe MC Century、The Concorde Century、The SPU Centuryを発表
Concordeの全面モデルチェンジによりMKIIシリーズ発表
- 2019 Concorde 40 Anniversary、MC Anna Diamond、MC A Mono、ST-70、Reference SPK-Black Premium、Reference SPK-Bronze Premiumを発表



The MC Century(2018)

2020

- 2020 DJカスタムラボをスタート。デンマーク中部ネストヴェズにテクノロジー&アコースティックセンター開設
MMスタイラス製造ライン自動化。VNL、SPU Ethosを発表

～追い求めたのは究極のリアル・MC Verismo完成～

- 2021 2M Black LVB250、MC Verismoを発表
- 2022 Concorde MkII Elite、MC Diamond、EQA-2000を発表
- 2023 AS-212R/AS-309Rトーンアーム、2M Premounted シリーズ、SPU GTE 105を発表
- 2024 Concorde Musicシリーズ、SPU GTXシリーズを発表
- 2025 MC 90X、MC Xシリーズ、Concorde 5シリーズ、VNL TRIX/DANCEを発表



MC Diamond(2022)



MC 90X(2025)



MC X40(2025)



VNL DANCE(2025)

— Continue to the future. —



MC Diamond

新たなる至高を示すもの。 空芯、カーボン、Diamond

創立100周年を記念して発表したThe MC Centuryより4年を経て、オルトフォンは自社の至宝である無垢単結晶ダイヤモンド・カンチレバーについての研究を進め、この特性をより深く理解するに至りました。この成果を存分に生かし、数多あるラインナップの頂点に君臨するフラッグシップモデルとして新たに誕生したのがMC Diamondです。「正統な音」というオルトフォンの理念は、また一歩上のステージへと昇りました。



時間すら表現する、 無垢単結晶のダイヤモンド・カンチレバー

高性能なカートリッジのカンチレバーには、高音域の解像度や定位感、空間表現力などに優れた素材が使用されます。ダイヤモンドは特にこれらの要素に秀でており、カンチレバー素材の頂点に君臨しています。地球上で最も硬いため、カートリッジが音溝からの音声信号をトレースして様々な加重が加わった際の変形や、カンチレバー内部で生じる損失が最も少なくなります。このため高音域は当然として低音域に至るまで極めて高解像度な、全てを見通すかのような音楽再生が可能となります。そしてこのダイヤモンド・カンチレバーでのみ明確に理解できるのが「時間」の表現です。ダイヤモンドは音の伝達速度がボロンやベリリウムを超えて最も速いため、素材の特性を十分に理解した上で最適な設計がなされたカートリッジで音を聴くと、そのスピードの差を感覚で理解することができます。しかし一般的なカンチレバーでは、それは意識されることすらありません。様々な素材と比較試聴した後にダイヤモンド・カンチレバーの音を聴き、また元の素材へ戻した時、初めて体で理解することができます。実際に聴かずして、この次元を味わうことはできません。



新たにMWCNTを配合した、 MC Diamond専用設計のダンパー素材

近年、オルトフォンはダンパーゴムに関する新たな研究の成果を、製品採用による実用化という形で結実させました。これはMWCNT(マルチ・ウォール・カーボン・ナノチューブ)と呼ばれる炭素微粒子をダンパーとなるゴム素材に配合させたもので、これまでの素材に比べ不要共振の減衰を意図する「制動」と、適切な角度や位置にカンチレバーを保持し続ける「支持」の性能が更に向上しています。これを活用すべく、MC DiamondにもMWCNT配合の専用ダンパーを新規設計して採用しました。カンチレバー素材内部における音の伝達が地球上最速であるダイヤモンドの特性を十二分に生かすには、それに適合するように設計・製造された高性能な自社生産のダンパーが不可欠です。

空芯コイルの巻線は、超高純度の無酸素銅線

MC Diamondのコイル巻線には、クリアでワイドレンジ、そしてきめ細かく滑らかなサウンドを特徴とする超高純度の無酸素銅線が使用されています。Centuryの血統を受け継ぐ新たな頂点として計画された本機のコイル導体には、オルトフォンがこれまでに採用した数多の材料が検討され、試聴が繰り返されました。その結果、歴代のフラッグシップに用いられてきた超高純度銅線をあらためて採用する運びとなりました。限りなく純粋な、コイル導体の個性すらも排した音をつくるためには、至高の材料であるこの銅線が欠かせません。



フラッグシップにのみ搭載されたWRADシステム

MC Diamondには、歴代のフラッグシップシリーズにのみ使用されてきたWRADシステムが採用されています。これはオルトフォンの特許技術・WRDシステムを更に進化させ、本シリーズ特有の空芯コイルを支えるアーマチュア(巻芯)の大口径化やそれに伴う磁気回路の大型化によって生じたスペースを活用し、ダンピングシステムの更なる高精度化を目指したものです。十字型の非磁性体アーマチュアの先端をポピン状とし、相対するダンパーゴム中央に凸型のリブを入れて嵌合のうえ密着させることで、カンチレバー動作時の制動と支持をより完全なものとしています。樹脂やゴムなど軟質な非金属材料の加工・成型を得意とし、高精度な医療機器の部品も生産しているオルトフォンだからこそ実現した機構です。

※WRADの詳細はP.5をご参照下さい。

大型で強力、オルトフォンの夢を 具現化した空芯タイプの磁気回路

本機の磁気回路は、かつてSPUで実用化した「オルトフォン・タイプ」と呼ばれているものを源流としています。しかし、この新世代型の磁気回路は非常に大型で強力な磁石を搭載しており、また高効率化によってSPUと同程度の出力を可能としています。本来、空芯タイプは一般的な鉄芯タイプのように純鉄のアーマチュアによる出力のサポートを受けられないため、同条件下では実用に耐えないほど小さな音量となってしまいますが、多くの歳月をかけて研究を重ね、強力で高効率な磁気回路の開発に成功。空芯コイルを使用しながら一般のMCカートリッジと同レベルの0.2mVという高い出力を誇ります。

MC Diamond

出力電圧	0.2mV	カンチレバー	無垢単結晶ダイヤモンド
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±2.0dB	適正針圧	2.6g
ダイヤモンド針	Special polished Nude Ortofon Replicant 100	自重	17.5g

推奨ヘッドシェル:LH-10000(本誌 P.40)

SLMチタンとTPEボトムカバー

大型で強力な専用磁気回路を支えるため、ハウジングはSLMテクノロジーを用いてチタン粉末をレーザー溶融し、三次元的に一体成型しています。さらに底面には、不要共振をシャットアウトするためにTPE(サーモ・プラスチック・エラストマー)のボトムカバーを装着。このエラストマー素材を使用することで、完全な剛体とならずに適度な不要共振の減衰を得ることが可能となります。柔よく剛を制すという言葉の通り、カートリッジのハウジングはただ硬いだけでは共振をコントロールできません。ボトムカバーに「柔」のTPE、ハウジングに「剛」のチタンを用いて双方に対して完璧な対策を行うこと、これこそがあるべき理想の姿と考えます。



サウンドの伝達において最速を誇る「Diamond」の勢いそのままに、もっと先へ。為されるべきは手綱を引くことではなく、さらに拍車を入れることです。オルトフォンが示す究極は、次の理想が存在する限り留まるところを知りません。



MC Verismo

オルトフォンが示す究極のリアル、 その名はVerismo (ヴェリズモ)

オルトフォンの理念とサウンドポリシーは「正統な音」の具現化です。これを社名とする我々はこの理念に向けて様々な技術や理論を駆使したアプローチを行い、新たな製品として結実させています。無垢単結晶のダイヤモンド・カンチレバーという夢の素材を得て、オルトフォンはThe MC CenturyとMC Diamondという珠玉の果実を世に示すことができました。しかし、理念の探求に終わりはありません。新たな「正統な音」としてオルトフォンが新たに誕生させたのは、『Verismo』の名を冠する金剛石の結晶です。

Special Movie



Verismo(ヴェリズモ)という言葉は19世紀末から20世紀初頭にイタリアでみられたリアリズム的な文学運動と、それに触発されて誕生したイタリアオペラの潮流のことを指します。これはラテン語のVeritasを語源とし、イタリア語でも同様に「真実の」「本当の」を意味するVeroという単語を冠したもので、日本語では「真実主義」「現実主義」といった意味をもちます。オルトフォンはこのVerismoをテーマとして「正統な音」へのアプローチを行い、徹底的にHi-Fiな、究極のリアルをサウンドとして現しました。



無垢単結晶ダイヤモンド・カンチレバーの普及を目指して

オルトフォンはこれまで、サファイアやルビー、ポロンなどの宝石/半金属系素材によるカンチレバーを積極的に自社製品へと採用してきました。これはひとえに、素材の特性が極めて理想的であり、高コストであってもなお採用したいと思わせる魅力があったためです。そして宝石系素材の頂点である無垢単結晶ダイヤモンド・カンチレバーの誕生が、我々の理想を更なる高みへと押し上げたことは言うまでもありません。素材内部での音の伝達速度が最も速く、その結果トランジェント特性に優れ、またピックアップした音声信号の微細なニュアンスまでも極めて忠実に伝達する。その珠玉のサウンドをより多くの皆様へ伝えるため、コスト面の問題を無視してダイヤモンド・カンチレバーが採用されたのは、Verismoという言葉に対するオルトフォンの熱意の表れです。



オルトフォンが誇る磁気回路とFSE、 アーマチュアやAucurumのコイル

新世代型の磁気回路は、SPUで開発された最初の「オルトフォン・タイプ」と出力電圧は同等、もしくはそれ以上のパワーを出しながらサイズは1/4程度まで小型化されています。極めて高い磁力を誇るネオジウム・マグネットはこの磁気回路の要となっており、外部からの異物混入に対しても強く、内部への鉄粉などの吸着を防ぎます。また、磁気回路のマグネット中心に開けられた穴にはFSE(フィールド・スタビライジング・エレメント)という導電性の小型シリンダーが取り付けられており、左右チャンネル間のセパレーションの向上とチャンネルバランス差の縮小を可能としました。そして発電コイルの巻枠であるアーマチュアには一般的な鉄よりも磁力を帯びにくい特殊な合金を採用。超小型の磁気回路でも高出力を保ち、かつ強力なマグネットから動作上の干渉を受けにくくなっています。また、コイル巻線にはMC Diamondと同じく、6N高純度導線に金メッキを施したAucurum(オーキュラム)を採用。サウンドの明瞭さ、解像度や空間表現力の高さからVerismoの線材として白羽の矢が立ちました。

さらに洗練されたWRD、 MWCNT配合の新たなダンパー素材

ダイヤモンド・カンチレバーやアーマチュアの動作を支えるゴムのダンパー部分には、オルトフォンの誇る特許技術WRDシステムが採用されています。これはダンパーゴムを高音域用と低音域用に分割し、その間に重質量な貴金属であるプラチナのディスクを挟んだものです。低音と高音では発生する振動が異なるため、それぞれに最適な硬さのダンパーゴムを用いてより完璧なダンピングを行います。プラチナディスクはスタビライザーとしての役割も果たしており、「支持」と「制動」を制御することで不要な共振を排除し、振動系を理想的な形で動作させています。またダイヤモンド・カンチレバーを使用するカートリッジには、硬さや素材をカスタマイズし調整された専用のダンパーゴムが不可欠です。Verismoの設計に際しても、サウンドイメージも含めて十分に考慮された専用ダンパーを開発。MWCNT(マルチウォールカーボンナノチューブ)が配合された新型のゴム素材が採用されました。MWCNTはナノメートル単位の非常に微小な炭素微粒子であり、カンチレバーを含む振動系のトレース性能やダンピング性能、サウンド面においてレンジ感や解像度が飛躍的に向上しました。オルトフォンは全カートリッジのダンパーゴムを配合段階から100%内製することで部品の精度・硬さを厳格にコントロールし、また機種ごとにダンパーをカスタマイズして理想通りの音色をつくり上げています。

新規デザインの完全一体型、 SLM成形によるチタンハウジング

新規開発のハウジングは、北欧デザインの極めてシンプルな「用の美」を体現するようなフォルム。オルトフォンがこれまで蓄積してきた叡智と最先端の機械工学の結晶でもあります。この美しいチタン製のハウジングは、SLM(セレクトティブレーザーメルトンギン)を駆使して一体成型されています。これは高度にソフトウェア制御された加工マシンで金属粉末をレーザー溶融、三次元的に部品を成形していくもので、最新テクノロジーの粋である3Dプリント技術の一種です。切削加工の難しいチタンから高精度かつ曲線を多用したデザインハウジングをつくるためには、この技術が不可欠です。そしてハウジング天面にはヘッドシェル取付用のM2.5径のネジ穴と3点のコンタクト・ポイントがあります。これもSLMによって完全に一体成型されており、不要共振の徹底的な排除を目指しています。コンタクト・ポイントは共振の排除だけでなく、2本のネジの締め具合を調整することでカートリッジのアジマス(正面から見た際の左右方向の傾き)微調整にも用いることが可能です。



MC Verismo

出力電圧	0.2mV	カンチレバー	無垢単結晶ダイヤモンド
周波数特性	20Hz-20,000Hz +2/-1dB	適正針圧	2.6g
ダイヤモンド針	Special polished Nude Ortofon Replicant 100	自重	9.5 g

推奨ヘッドシェル:LH-10000(本誌 P.40)

Ortofon
Replicant 100
(オルトフォンプリアント 100)





MC 90X

90X

スケルトン・フレームの衝撃再び。
新たなる「90」、ここに誕生

ただ、「正確」なサウンドを求めて。オルトフォン創立90周年を記念して誕生したMC A90は、外殻をもたずに磁気回路と天頂部のヘッドシェル取付面、そしてリード線端子をスケルトン・タイプのフレーム1本だけで支える特異な構造で世に衝撃を与えました。この「90」に、新たな伝説が加わります。美しいコバルトブルーのスケルトン・フレームと専用ダンパーを備えたMC 90Xは、新時代のリファレンス・モデルに相応しい性能を誇ります。

MC 90Xの目指したものは、振動系がピックアップして磁気回路で電気信号に変換された音声を文字通り「正確(Accuracy)」に出力することです。そのためにはカートリッジのボディ由来の質量や、ボディ素材に起因する固有共振からくる再生音への味付けさえも排さねばなりません。その結果、本機は肉を極限まで削いだスケルトン形状のフレームによって自重を9.5gに抑え、同時にフレーム素材固有の共振も排することに成功し、理念の具現化に至りました。



本体質量を見直し、 生まれ変わったステンレス製フレーム

金属粉末をレーザー溶融して対象物の成型を行うSLM(Selective Laser Melting、セレクトィブ・レーザー・メルティング)は極めて高コストではありますが、精度と加工自由度の高さから高性能カートリッジのハウジングやフレーム成型には欠かせないテクノロジーです。MC A90での実用化以来、オルトフォンは自社のハイエンドモデルの多くにSLMを用いたハウジングやフレームを採用し、世代交代を重ねながら更なる高精度化を追求してきました。本機は極めて堅牢なSLM成型のステンレスのスケルトン・フレームを備えているため、一般的な再生環境下では不要共振となる反動をヘッドシェル側に伝えることはありません。また最新のSLM技術を駆使し、不要共振やフレーム筐体の金属がもつ固有振動を打ち消すための特別な構造を備えることで、カートリッジがより「正確」なサウンドを再生することができます。



新フレームにあわせ、 専用設計されたダンパーシステム

カートリッジの自重を増減させると、振動系の動作時にダンパーが受け止めて支持する運動エネルギー量も変化します。そのため、旧モデルに比べ本体質量の大きい(重い)MC 90Xの開発に際しては、本機の特性に合わせた専用のダンパーゴムが設計されました。このダンパーは、オルトフォンのハイエンドモデルに多用される特許技術のWRD(Wide Range Damping、ワイド・レンジ・ダンピング)システムを採用しており、それぞれ弾性が異なる前後2枚のダンパーの間にスタビライザーとなるプラチナリングを挟んでいます。実際にレコード盤を再生する際には、振幅の細かな高音域では追従能力の高いフロント側のダンパーを動作させつつ中央のプラチナリングで制動を効かせます。そして大振幅となる低音域では支点到近く保持力の高いリア側のダンパーが動作し、ふらつきを発生させることなく正確に低音の信号を読み取ることが可能となります。当然、この2枚のダンパーの適正な弾性の値は各カートリッジのボディ質量や(カンチレバーを含む)素材によって異なります。これを完璧な状態に仕上げるためには、オルトフォンのように専用のダンパーラボを設け、全てのカートリッジ用ダンパーを自社生産する以外にありません。

FSEを備えた磁気回路、 Aucurumのコイルワイヤー

MC 90Xには、オルトフォンの誇る超小型磁気回路が搭載されています。この磁気回路では、中央にリング状の穴が開けられたマグネットの前後にフロントおよびリアのヨークが配されています。フロント側のヨークにはカンチレバーを通すための穴が開けられており、この穴部分を除くと、磁気回路は完全に密閉されています。そしてマグネットに開けられた穴の裏側には、オルトフォンがFSE(Field Stabilizing Element、フィールド・スタビライジング・エレメント)と呼称している独自技術の非磁性金属リングを装着しています。このリングには導電性を高めるための表面処理が施されており、ここに電流を誘導して微弱な磁場を発生させることが可能です。ちなみに、FSEのリング内部には6N高純度銅線に金メッキを施したAucurum(オーキュラム)導体のコイルが軽量の十字型のアーマチュアに巻かれた状態で収められていますが、これがレコードのトレースによって動作すると磁気回路の磁場に乱れが発生します。FSEに生じている微弱な磁場は、この乱れを相殺して安定化させる役割をもちます。この効果により、特に高音域の再生特性を飛躍的に向上させています。

ヘッドシェル、トーンアームとの マッチングで生じる無限の可能性

MC 90Xはハウジングという贅肉が皆無なスケルトン形状のため、ボディ部分は必要最低限まで削られています。そのため、ハウジング分の体積を抱える一般的な構造のカートリッジに比べ、ボディ鳴きによる固有の共振をほぼ皆無にまで低減させました。ハウジングの響きによる再生音への干渉がなく、極めて純粋で「正確」な信号のピックアップを実現したカートリッジだといえます。さらに、本機は自重9.5gと現代のカートリッジでは軽量の部類に属しています。カートリッジの本体質量に起因する再生音への(結果的な)干渉も非常に軽微なため、組み合わせるヘッドシェルの素材や形状、質量次第でサウンドは如何様にも変化します。これはつまり、ヘッドシェルの先にあるトーンアームやプレーヤーの特徴もまた明快に示すことは言うまでもありません。ご使用のオーディオシステムとセッティングの方法次第ではありますが、再生されるサウンド全体や低音域の量感の多寡、またはその重心位置、高音域の抜け具合などをコントロールすることも可能です。



MC 90X

出力電圧	0.25mV	カンチレバー	ポロン
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±1dB	適正針圧	2.3g
ダイヤモンド針	Special polished Nude Ortofon Replicant 100	自重	9.5g

推奨ヘッドシェル:LH-10000(本誌 P.40)

Ortofon
Replicant 100
100
100





MC A Mono

モノラルに限界はなかった。
愛聴盤の価値は、
A Monoによってのみ示される

モノラルの魅力を誰よりも知っているからこそ、この文化を後世に伝えていきたい。モノラル盤に秘められたポテンシャルを世に示したい。自身も熱烈なモノラルファンであるチーフエンジニアのライフ・ヨハンセン博士の切なる願いにより、MC A Monoは誕生しました。



モノラルカートリッジ初、SLM成形によるチタンモノコックボディ

MC A Monoのボディ製作にあたっては、オルトフォンが上級機種に用いているSLMテクノロジーを用い、ソフトウェア制御されたマシンでチタン粉末をレーザー溶融してゆく三次元的な立体成型を行っています。ヘッドシェル取付ネジの穴でさえ完全一体成型のモノコックボディは、振動系やマグネットを強固に固定し、特徴的なスケルトンタイプのデザインにより外観上のシンプルさはもちろん、カートリッジ自体の質量も徹底的に軽量化。本体重量6gという、現代にあっては珍しい軽量なハイエンドカートリッジです。モノコックボディの裏面にはTPE(サーモプラスチック・エラストマー)と呼ばれる軟質素材のダンピング材が取り付けられ、カートリッジ内部のワイヤーを保護するとともに複合素材の併用により完璧な防振がなされ、不要共振はシャットアウトされてピックアップされ信号の純化に大きく貢献しています。

AucurumのMCコイルとボロンカンチレバー、WRDシステム

本機のMCコイルには6N高純度銅線に金メッキを施した、Aucurum(オーキュラム)と呼ばれる導体を採用。特有の柔らかいサウンドは、高解像度・ワイドレンジながら硬質になり過ぎない品位の良さをもたらします。また、非常に高い剛性とサウンドの伝達速度を誇るボロンカンチレバーにより立ち上がり早く、音の滲みを感じることはありません。また、オルトフォン独自のWRD(ワイド・レンジ・ダンピング)システムは本機にも採用されています。振動系を支えるダンパーゴムを高域用・低域用で前後に分割し、間にプラチナのディスクを挟むことで不要な共振を抑え、高いトラッキング性能を実現しています。



限りなく空芯に近いアーマチュアとFSE

Aucurumのコイルが巻かれた十字型のアーマチュアには、通常の鉄よりはるかにマグネットの影響を受けない特殊合金素材を採用。強力なリング状のネオジウムマグネットからの磁気に左右されることがなく、正確に盤の音溝をトレースすることが可能です。そして、このリング状のマグネット内周にはFSE(フィールド・スタビライジング・エレメント)と名付けられた導電素材の円筒が取り付けられており、これによりマグネットがアーマチュアに及ぼす磁気の影響を排除、トレース時の動作によって発生する歪みを最小限に抑えています。



MC A Mono

出力電圧	0.2mV	カンチレバー	ボロン
周波数特性	20Hz-20,000Hz +2db/-1dB	適正針圧	2.3g
ダイヤモンド針	Special polished Nude Ortofon Replicant 100	自重	6g

推奨ヘッドシェル:LH-10000(本誌 P.40)



モノラル時代より続く伝統と実績 オルトフォンが誇る至高の Mono カートリッジ

モノラル LP が誕生した1940年代末より、オルトフォンはモノラル用のカッターヘッドや業務用のカートリッジを開発・生産してきました。その血を最も色濃く継いだCG25 Di MKIIをはじめとして、現在も多数のモノラルカートリッジを生産し続けています。



Special Movie



アナログ研究・技術評論の第一人者、海老沢 徹 先生によるモノラルカートリッジ使用時の注意点や内部構造についての解説動画です。

モノラル初、特殊研磨されたオルトフォン・レプリカント 100の採用

モノラルカートリッジでは初となる、上級モデル専用に特殊研磨されたオルトフォン・レプリカント 100 をスタイラスチップに使用。レコード盤のマスターとなるラッカー・マスターの溝を刻む際に使用するカッティング・ヘッドの針先形状に最も近く、数多あるスタイラスチップの中で最も盤溝との接触面積が多いため、細かな信号も逃さず読み取ることができる究極のスタイラスです。このスタイラスの採用により、これまで聴くことのできなかった非常にハイエンドなモノラルサウンドをお楽しみ頂けます。

至高のモノラルカートリッジとして誕生した、MC A Mono。かつての銘盤から復刻・新規プレスに至る全ての「Mono」を、常識を覆す高解像度・ワイドレンジなサウンドでぜひともご体感ください。



驚異の解像度と定位感。針を下ろしたとき、奏者はここに顕現する



高解像度、そして重厚。この奇跡の両立

MC Xpression

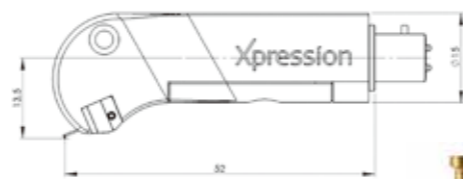
英語で「表現」を意味するXpression。このモダンなデザインのMCカートリッジはアナログレコードの音溝に刻まれた情報の全てをピックアップし、電気信号として表現することを目指した製品として開発されました。



理想的な高密度ステンレスボディ

磁気回路にはMC Windfeldシリーズに用いられたFSEを採用しつつ更なる改良が施され、ハウジング部分はSLM(セレクトィブ・レーザー・メルティング)を用いて金属などの微粉末をレーザー溶融させて立体成型を行うことで、ヘッドシェル部分までの全てが一体のモノコック構造となっており、共振対策には非常に理想的な高密度ステンレスボディを具現化しています。更にこのボディはSPUシリーズの使用環境に互換する寸法となっているため、シェルを差し換えて自重、針圧の調整を行うだけで使用することが可能です。

これに加えてOrtofon Replicant 100ダイヤモンドスタイラスとボロンカンチレバーを併せて採用したMC Xpressionは、高い解像度と音像定位の良さを持ち、特に空間表現能力に優れたオルトフォンの誇る現代の傑作です。



MC Xpression

出力電圧	0.3mV	カンチレバー	ボロン
周波数特性	20Hz-20,000Hz +0.5/-1.5dB	適正針圧	2.6g
ダイヤモンド針	Special polished Nude Ortofon Replicant 100	自重	28g



MC Windfeld Ti

これまでステンレスで構成されていたセンター部分のメインフレームを、現代技術の粋といえるSLM(セレクトィブ・レーザー・メルティング)を用いたチタン粉末の立体成形タイプにアップグレード。究極の制震・高い発電効率とトレース能力を備えたMC Windfeld Tiは、アナログ再生のさらなる可能性を示し、その新たなステージを開きます。



カートリッジにとって極めて理想的、共振ゼロの新型モノコックフレーム

レーザーによって立体造形されたメインフレームは極めて軽量でありながら剛性に優れ、高いダンピング性能を発揮して全ての不要共振を排除します。SLMの使用が可能となったことにより設計自由度が飛躍的に向上し、切削では製造が困難であった素材や複雑な形状でも精密な立体成型を実現しました。これにより、先代機では分割されていた3点のヘッドシェル接地点をフレームと一体構造とし、分割による鳴きやハウジング素材の違いによるサウンドの音色差も排除。カートリッジにとって極めて理想的な、共振ゼロの新型モノコックフレームの誕生です。

混じり気の無い理想的なトレースをサポート

本機のMCコイルには6N高純度銅線に金メッキを施したAucurum(オーキュラム)導体を採用。特有の柔らかいサウンドは、高解像度・ワイドレンジながら硬質になり過ぎない品位の良さをもたらします。また、非常に高い剛性とサウンドの伝達速度を誇るボロンカンチレバーにより立ち上がり早く、音の滲みを感じることはありません。また、オルトフォン独自のWRD(ワイド・レンジ・ダンピング)システムは本機にも採用されています。振動系を支えるダンパーゴムを高域用・低域用で前後に分割し、間にプラチナのディスクを挟むことで不要共振を抑え、高いトラッキング性能を実現しています。



30年以上にわたりオルトフォンのチーフエンジニアを務めたペア・ウィンフェルド氏の名を冠したモデル



MC Windfeld Ti

出力電圧	0.2mV	カンチレバー	ボロン
周波数特性	20Hz-20,000Hz +2/-1dB	適正針圧	2.3g
ダイヤモンド針	Special polished Nude Ortofon Replicant 100	自重	11g



推奨ヘッドシェル:LH-10000/LH-9000/LH-6000(本誌P.40)



オルトフォン独自の超小型磁気回路をもった、21世紀の高性能MC

MC Cadenza Series

オーケストラとソリスト(独奏者・独唱者)からなる協奏曲などで、ソリストがオーケストラの伴奏なしに自由な即興演奏や歌唱を行う部分をイタリア語でCadenza(カデンツァ)と呼びます。この名を冠した本シリーズは、オルトフォン創立80周年を記念して誕生した当時のフラッグシップMC Jubilee譲りの新型磁気回路を搭載し、MC Kontrapunktシリーズの後継者に相応しく極めてハイクオリティな音楽再生を得意とします。モノラル仕様を含めると5色のラインナップを誇るCadenzaシリーズは、ハイエンドモデルと同一構造の強力なネオジウム・マグネットを用いた磁気回路や高性能カンチレバーおよびスタイラスチップ、金や銀などの貴金属マテリアルを用いたコイル巻線を積極的に用いて、オルトフォンの理想とするHi-Fiサウンドを具現化しています。



MC Cadenza Red

MC Cadenzaシリーズは、Kontrapunktシリーズからのモデルチェンジにあたって本体中央部のカラフルなメインフレーム部分の素材がアルミニウムに変更されました。これはかつての上位モデルであったMC Jubileeの仕様そのもので、シリーズ全体が同様にアップグレードされています。MC Cadenza RedはKontrapunkt αの後継機としてアルミカンチレバーと6N純銀線コイル、無垢ダイヤモンドのファインライン(高性能楕円針の一種)針を継承し、シリーズ内で最もエネルギー豊かなサウンドを得意とします。



MC Cadenza Blue

真紅に輝くルビーは、その美しさから「宝石の女王」ともいわれます。これをカンチレバーに採用したMC Cadenza Blueは、先代のKontrapunkt b譲りでありながらこれを超えた、極めて鮮烈なサウンドを手に入れました。無垢ダイヤモンドのラインコンタクト針であるFG70と、6N純銀線の煌びやかでクリア、更に高解像度な音色も相まって、本機特有の独特な魅力が人気を博しています。



MC Cadenza Bronze

MC Kontrapunkt Cの後継機となったMC Cadenza Bronzeは、オルトフォンが自社の名を冠した「Ortofon Replicant 100」スタイラスをシリーズで唯一採用しています。また実効質量の低減を目的としたコニカル(円錐)型のアルミカンチレバーと6N高純度銅線に純金メッキが施されたAucurum(オーキュラム)のコイル巻線により、極めてワイドレンジでありながら空間表現も得意とし、シルキーで滑らかな粒の細かいサウンドを奏でます。またCadenzaシリーズの両側面(黒色部分)はMIM(Metal Injection Molding)と呼ばれる、金属粉末と混合剤を射出成型した後真空炉で脱脂・高音焼結する加工法で作成しています。ネジ穴も含めた高精度な一体成型が可能であり、曲線を多用した優美なフォルムはこの技術の賜物です。



MC Cadenza Black

MC CadenzaシリーズのフラッグシップであるMC Cadenza Blackは、MC Jubilee由来の高性能ラインコンタクトである無垢シバタ針とボロンカンチレバー、そしてシリーズ唯一となるWRDシステムの採用モデルです。コイル巻線がAucurumに変更されたことでより明瞭でナチュラルな表現も可能となり、その実力は上級モデルにも引けを取りません。オルトフォンがMC Jubileeで完成させた超小型で高効率な発電を可能とするクロード型の磁気回路は、オリジナルにあたるSPUの「オルトフォン・タイプ」磁気回路と比較するとサイズ・質量ともに4分の1程度までコンパクト化されました。MC Cadenzaシリーズや上級モデルのMC Verismo, A Mono, Xpression, Windfeld Tiの性能を支えているのはこの磁気回路です。



MC Cadenza Mono

ハイクオリティなモノラル再生を目指して開発された本機は、MC Cadenza Redをベースとしつつアーマチュア(コイル巻芯)の配置がステレオ仕様のX字状からモノラル仕様の十字状に変更され、かつその左右方向に1チャンネル分のみのコイル巻線を配置することで、モノラル信号のピックアップに理想的な振動系を得ています。MC A Monoに次ぐ高性能なモノラルカートリッジであるMC Cadenza Monoは、名演奏を現代的な解像度で楽しむには最適な製品です。

Special Movie



シバタ針の開発経緯と理由とは?
海老沢 徹先生

アナログ研究・技術評論の第一人者、海老沢徹先生によるシバタ針(MC Cadenza Blackに採用)についての解説動画はこちら。










「オールドファインライントップ」の採用理由とは?
海老沢 徹先生

同じく海老沢 徹先生によるオルトフォン・レプリカント100(MC Cadenza Bronzeに採用)についての解説動画はこちら。



	MC Cadenza Red	MC Cadenza Blue	MC Cadenza Bronze	MC Cadenza Black	MC Cadenza Mono
出力電圧	0.45mV	0.5mV	0.4mV	0.33mV	0.45mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +3/-1dB	20Hz-20,000Hz +2/-1dB	20Hz-20,000Hz ±1.5dB	20Hz-20,000Hz +1.5/0dB	20Hz-20,000Hz +3/-1dB
ダイヤモンド針	Nude Fine Line	Nude FG70	Nude Ortofon Replicant 100	Nude Shibata	Nude Fine Line
カンチレバー	アルミニウム	ルビー	コニカルアルミニウム	ボロン	アルミニウム
適正針圧	2.5g	2.5g	2.5g	2.3g	2.5g
自重	10.7g	10.7g	10.7g	10.7g	10.7g
詳細情報	 Fine Line (ファインライン)	 FG70	 Ortofon Replicant 100 (オールドファインライントップ)	 Shibata (シバタ)	 Fine Line (ファインライン)

推奨ヘッドシェル:LH-10000/LH-9000/LH-6000(本誌 P.40)



純銀、ハニカム、ステンレスフレーム。オルトフォンMCの定番は、「X」へ

MC X Series

新時代の「定番」となるべく誕生したXシリーズは、全モデルに共通して採用した高純度銀線コイル、軽量かつ高精度な十字型アーマチュア、シリーズ初のハニカム天面を備えたMIM成型によるステンレス製フレーム、各モデル専用設計のダンパーゴムを特徴としています。これらの高品位な材料や生産技術は、オルトフォンが歴代のフラッグシップやハイエンドモデルに膨大なコストを投じることで会得してきたノウハウや知見の結晶です。歴史に残る名機、「X」の鼓動をお聴き逃しなきよう。

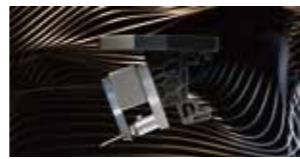
MIMで一体成形された、初採用のハニカム天面とステンレスフレーム

MC Xシリーズでは、本体上部のトッププレート天面にハニカム形状のリップを設けています。このリップとトッププレート、更にはカートリッジの背骨となるフレーム部分までも一体成型とすることで、レコード再生時に発生する不要共振を徹底的に排除しています。そしてこのトッププレートとフレームには、オルトフォンのMC10・20・30シリーズでは史上初めて重質量なステンレス素材を採用しました。ステンレス特有の質量を伴った高い制振効果によって再生音の定位感向上を得ています。



ステンレスフレームに組み込まれた、新開発の磁気回路

MIMを用いて成型されたMC Xシリーズのステンレスフレームには、先代のQシリーズを凌ぐ新型のMC用磁気回路が固定されています。この磁気回路は、近年の加工技術の進歩により部品点数を減らすことに成功し、構成部品の一体化と高精度化をさらに一歩進めました。その結果、磁束の分布がより均一になるといふ成果を得ています。これにより、磁束密度が適正化されて磁気特性と発電(出力)の高効率化を実現しています。



特徴的なシェイプをもつ、デンマーク・デザインのボディハウジング

ヘッドシェルに接するトッププレートから針先方向へと向かうにつれて狭まってゆく特徴的なハウジング形状は、上位モデルのMC Cadenzaシリーズやその祖となったMC Jubileeから範を得たものです。これにより、針先先端方向(カートリッジ底面側)の実効質量を小さく(軽く)することを可能とし、カートリッジが音溝をトレースして動作する際の質量バランス最適化。まさに「用の美」にも似た必然から生まれたといえます。



全モデル共通の高純度銀コイルワイヤーと十字型アーマチュア、専用ダンパー

MC Xシリーズでは、材料のコストを度外視して全モデルに高純度銀線のコイルワイヤーを使用しています。音声信号の伝送速度が最も速い銀(Ag)は、信号劣化も最小限で済むため、微弱信号の伝送には極めて理想的な金属導体であるといえます。コイルワイヤーは軽質量な十字型のアーマチュアに巻き付けられており、さらにその背後にあるダンパーゴムによって、振動系は適切に支持され、また不要共振の制動も行われています。



Special Movie



MC X10

MC X10は、数多あるオルトフォンMCカートリッジのエントリーモデルにあたります。しかし、その仕様や音づくりに一切の妥協はありません。上位モデルと共通のステンレスフレームや高純度銀線コイルと十字型アーマチュア、高精度な磁気回路はそのまま本機にも採用されており、これに王道のアルミカンチレバーと楕円針を合わせることで新時代のオルトフォン・サウンドを体現する存在となっています。エネルギーで豊かな量感をもちながら音抜けや定位感にも優れた万能モデルとして、このMC X10は大いに活躍することでしょう。



MC X20

MC20シリーズは、1970年代からオルトフォンのチーフエンジニアをつとめたペア・ウィンフェルト氏を開発責任者として誕生し、現代まで愛され続けているMC型カートリッジの金字塔です。無垢楕円針の採用によりX10を超える高解像度とワイドレンジを得たMC X20は、再生する音楽ジャンルを問わずにダイナミックで鮮烈なサウンドが特徴。質量の大きな(重い)ステンレス一体成型フレームの採用により再生音の重心位置が下がったことで、腰の据わった低音を魅力としています。高純度銀線の煌びやかさも相まって、聴き応えのあるパンチを効かせた音色は躍動感にも満ちており、まさにアナログサウンドの醍醐味と呼ぶにふさわしい逸品です。



MC X30

オルトフォンのMC10・20・30シリーズにおいて、「30」は各世代の上位モデルに付与されてきた栄光のナンバーです。本機の仕様策定にあたってはその原点に立ち返るため、栄光の「30」初代モデルを範とし、無垢ファイナラインのスタイラスチップとアルミカンチレバー、銀線コイル等の伝統を忠実に踏襲しています。MC X30はレコード盤に刻まれた空気感まで表現する緻密さ、繊細さを最大の持ち味としますが、これはかねてより代々の30シリーズが最も得意としてきたものでもあります。伝統から生まれた新しい「X」のサウンドを、存分にご堪能頂けることを願ってやみません。



MC X40

MC Xでは、シリーズの最上位モデルとして新たに「40」のナンバーが加わりました。このMC X40には、かつてオルトフォンのフラッグシップであったMC Jubileeと共通の、ポロンカンチレバー/無垢シバタ針が奢られています。またXシリーズに共通の高純度銀線コイルも、Jubileeと共通の仕様です。オルトフォンがこれまでに培ってきた至高の技術を惜しみなく投入したMC X40は、まるでハイエンドモデルさながらの解像度とスピード感、また圧倒的な空間表現能力を誇ります。アナログ再生の可能性を貪欲に追い求める方に自信をもってお勧めしたい、高性能かつコストパフォーマンスに優れたMCカートリッジの決定版です。



	MC X10	MC X20	MC X30	MC X40
出力電圧	0.4mV	0.4mV	0.4mV	0.4mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±2dB	20Hz-20,000Hz ±1dB	20Hz-20,000Hz ±1dB	20Hz-20,000Hz ±1dB
ダイヤモンド針	Elliptical	Nude Elliptical	Nude Fine Line	Nude Shibata
カンチレバー	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	ポロン
適正針圧	2.0g	2.0g	2.0g	2.0g
自重	8.6g	8.6g	8.6g	8.6g
詳細情報	Elliptical (楕円針)	Elliptical (楕円針)	Fine Line (ファイナライン)	Shibata (シバタ)

推奨ヘッドシェル:LH-4000(本誌 P.40)

SPU Royal G MK II



R. Gudmandsen



コンセプトを継承しつつより一層の 高解像度と繊細なサウンドを持った傑作

非常に多彩なラインナップを誇るSPUシリーズの源流が通称「オールド・SPU」にあることは言うまでもありませんが、1981年にこれらの上位グレードとして誕生したSPU Gold GE/AEによって、そのサウンドに新たな境地が示されました。このコンセプトは後にSPU Reference G/Aへと引き継がれ、1998年のオルトフォン創立80周年を祝して開発されたSPU Royalシリーズへと結実します。本シリーズの開発にあたっては、当時最高のSPUとするため様々なマテリアルの使用が検討されました。その結果、スタイラスにはレプリカント100が、コイル巻線にはElectrum(エレクトラム)と呼ばれる金と銀の貴金属合金が採用されています。これにより、RoyalはGold・Referenceのコンセプトを忠実に継承しながら更なる高解像度・ワイドレンジ化を実現しています。SPUの中で最もシルキーかつ繊細な音色は、小編成の弦楽器や軽妙なタッチのピアノ、またボーカルなどにも最適です。



SPU Meister Silver MK II

純銀。煌びやかで重厚、腰の据わった魅惑の低音

SPU Meister Silver MkIIは、60年以上前にSPUの開発を主導したエンジニア、ロバート・グッドマンセン氏のサイン「R. Gudmandsen」をヘッドシェル側面に刻んだシグネチャー・モデルです。彼は1941年にオルトフォンに入社したのち、SPUをはじめとする様々なカートリッジや音響機器の開発に携わり、やがて「ミスター・SPU」と呼ばれるようになりました。そして在職50周年記念としてデンマーク女王マルグレーテ2世より文化功労章を授与されたことを契機とし、自らの手でリニューアルさせた新時代の象徴、SPU Meisterを完成させます。1950年代には存在しなかった強力なネオジウム・マグネットと日本で開発されたばかりの7N(99.9999%)高純度銅線の採用によって、Meisterは開発者

自らが「生涯最高の傑作」と評したほどの銘機として生まれ変わりました。重厚で艶やかと評されるSPUのサウンドに更なる高みが存在することを示したグッドマンセン氏は、やがて誕生した新素材、6N高純度銀線をコイル巻線に用いた新モデルを開発します。それこそが、このSPU Meister Silverです。先代Meister譲りの腰の据わった重低音はそのまま、高純度銀線のもたらす独特の高音域をもつ本機は、SPUシリーズの中でも特に重厚かつ煌びやかな音色を特徴としています。



SPU Meister Silver MK II

出力電圧	0.3mV	カンチレバー	アルミニウム
周波数特性	20Hz-20,000Hz +2/-1dB	適正針圧	4.0g
ダイヤモンド針	Nude Elliptical	自重	30g

Elliptical
(楕円針)



SPU Royal N

金と銀が織り成す、 琴線に触れるシルキーサウンド

SPU Royalシリーズには、一般のヘッドシェルやシェル一体型トーンアームに取り付けることを想定したNaked(ネイキッド)モデルのSPU Royal Nもラインナップに加わっています。高性能なRoyalの音色はそのままに、様々なシェルやアームとのリアレンジを楽しみ頂くことが可能です。



SPU Royal G MK II

出力電圧	0.2mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +1.5/-0dB
ダイヤモンド針	Nude Ortofon Replicant 100
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	3.0g
自重	30g

Ortofon
Replicant 100
(オールド・ファンクショナル・100)



SPU Royal N

出力電圧	0.2mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +1.5/-0dB
ダイヤモンド針	Nude Ortofon Replicant 100
アルミニウム	3.0g
自重	13g(本体+Royal N付属アダプターの重量)

Ortofon
Replicant 100
(オールド・ファンクショナル・100)





SPU Synergy

最高にパワフル、そしてダイナミック

SPU Synergyは、ロバート・グッドマンセン氏の後継者で次代のチーフエンジニアとなったベア・ウインフェルド氏の手によって完成した、シリーズ最高の出力電圧0.5mVを誇るハイパワーなSPUです。カートリッジの出力電圧が高いということは、単に音量だけでなくサウンドの力感も増すことを意味します。そのため、Synergyの音色はSPUシリーズ随一のエネルギー感を誇ります。なお、SPUシリーズが伝統的に低インピーダンスであるのは周知のことですが、これはカートリッジ内部で発電を行うコイル巻線のターン数(コイルを巻いた回数)を少なくして巻線の長さを短く抑えることでコイルの抵抗値を下げ、同時に高域特性を維持することを目的としています。またそれに加えて、振動系(スタイラスチップ、カンチ

レバー、コイルとその巻芯であるアーマチュアなどの可動部分の総称)を軽量化させ、結果として針先の感度が上がることも期待できます。しかしコイル巻線のターン数が少ないと、カートリッジの出力電圧を上げることは非常に困難です。この原則に対処すべく、ウインフェルド氏は強力なネオジウム・マグネットを使用し、発電効率にも優れた本機専用の磁気回路を開発することでこれを克服しました。力感を必要とする金管楽器や大編成のオーケストラ、ビックバンドなどに対しては、最もパワフルなサウンドを特徴とするこのSynergyをお勧めします。



SPU Synergy

出力電圧	0.5mV	カンチレバー	アルミニウム
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±2.0dB	適正針圧	3.5g
ダイヤモンド針	Nude Elliptical	自重	28g

Elliptical
(楕円針)



SPU Classic GE MK II / G MK II

MCの原器、SPUの元祖。 60年の歴史と伝説はここから始まった

SPUの名は、Stereo Pick Up(ステレオ・ピック・アップ)の頭文字から取られています。ステレオLPレコードの実用化にあわせ、1950年代末に最初のSPUが開発された当時はカートリッジ・ヘッドシェル・トーンアームを総称してピックアップもしくはピックアップシステムと呼称することが一般的であったため、シンプルにステレオ用ピックアップという命名が行われました。また、現在までに開発された多くのMCカートリッジは、SPUの磁気回路を原型とした「オルトフォン・タイプ」と呼ばれる構造の磁気回路を使用しています。この磁気回路は以来60年以上にわたり、オルトフォン自身のみならず世界各国のMC型カートリッジに多大な影響を与えた、まさに「MCの原器」と呼ぶべき存

在です。発表当時、革新的な構造により一世を風靡したSPUのサウンドは重厚で骨太、エネルギーにして芳醇と謳われました。現行型モデルのSPU Classic G(丸針)/GE(楕円針) MkIIは、このサウンドを現代に伝える生き証人として今なお生産され続けており、30gという重量級の自重と4gの適正針圧、アルミカンチレバーに無垢ダイヤモンドの丸/楕円針という伝統の仕様を守り続けています。さらにこの豊かなサウンドを創造する決定打となっているのが、SPUおよびCGシリーズ専用のGタイプヘッドシェルの響きです。これらの要素ひとつひとつが奇跡的に調和して生まれたSPUサウンドは、音楽のジャンルを問わず、愛聴盤の魅力を最大限に引き立てます。



SPU Classic GE MK II

出力電圧	0.2mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +3/-2dB
ダイヤモンド針	Nude Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	30g

Elliptical
(楕円針)



SPU Classic G MK II

出力電圧	0.2mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±3.0dB
ダイヤモンド針	Nude Spherical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	30g

Spherical
(丸針)





#1

SPU #1S / #1E

すべてのアナログファンにおくる、「ファースト・SPU」

SPUは誕生以来、60年以上の長きにわたってレコードファンから愛され続けています。オルトフォンといえばSPU、これぞアナログサウンドの象徴であり、さらにはその王道とまでいわれてきました。またキャリアの長いオーディオファイルの間では現行のClassicシリーズ登場以前に生産されていた通称「オールド・SPU」への想いが今なお強く、若かりし頃に初めて聴いたSPUの音色に対する衝撃と憧憬が心をとらえて離さないとも伺います。このオーディオファイルたちの追憶と、語り継がれてきた伝説から生まれたのがSPU #1（ナンバーワン）です。半世紀を超えて生産されているSPUシリーズには様々なモデルが存在し、それぞれが明確なコンセプトを持っています。かつての銘品のように年月を経た古酒のような味わいをもつモデルは存在しませんでした。

本シリーズはオールド・SPUのように深みのある音色の具現化と、オルトフォンの象徴であるそのサウンドをより多くの皆様に楽しんで頂くための実力派エントリーモデルとしての性格を両立させることを目指してコンセプトが練られています。その結果、自らの手で王道と謳われたサウンドをリバイバルさせることに成功しました。初めてアナログの音色を味わう方に向けて、またSPUの名を知るベテランオーディオファイルにも向けての2つの意味を込めた「マイ・ファーストSPU」として、「MCの原器」Classicシリーズとは一味異なる、古き良き時代のサウンドを持ち味とする楕円針（E）と丸針（S）の2モデルを展開しています。再生レンジの広い楕円針（Elliptical）と、それに比べて中音域寄りの丸針（Spherical）はどちらも「マイ・ファーストSPU」に相応しい、歴史と伝統に裏付けられたサウンドを奏でます。



SPU #1S

出力電圧	0.18mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±3.0dB
ダイヤモンド針	Spherical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	30g

Spherical
(丸針)



SPU #1E

出力電圧	0.18mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±3.0dB
ダイヤモンド針	Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	30g

Elliptical
(楕円針)



SPU GTX S / E



SPU GTE 105



復活から「新生」へ。
21世紀のGT、ここに完成

SPU GTE 105によって約30年ぶりに復活したSPU GTシリーズに、早くも新たなモデルが登場。その名は「SPU GTX」。これまでのGTシリーズの総決算として、オルトフォンとスウェーデンLundahl社の手で共同開発された内蔵MC昇圧トランスを肝とするSPU GT特有のパワフルな音色はそのままに、現代のレコード再生用カートリッジとして見ても申し分のない性能を発揮することが可能となりました。ヘッドシェルの使用素材をABSから特殊ファイバーを配合した樹脂に変更し、SPU史上初、シェル本体とボトムカバーの完全同一素材化を実現。同時にシェルやカバーの更なる高剛性化も達成し、新生GTに相応しいGシェルがここに具現化されました。また本シリーズには、業務用機器を祖とするサウンドポリシーがあります。ヘッドシェルに起因する音色の色づけは極力排し、サウンドの「正確さ」を重視しています。SPUの伝統に則り、S（丸針）とE（楕円針）の2機種をラインナップしました。



鮮烈と躍動。
新規開発トランス内蔵の「GTE」

圧倒的なエネルギー感に支えられた鮮烈さ、そして躍動感。古のオーディオファイルたちに強烈な記憶を残し、伝説の銘品として語り継がれてきたSPU GTが、オルトフォン創立105周年という節目に楕円針の「SPU GTE 105」として復活しました。北欧スウェーデンのLundahl社と共同でGTシリーズ専用開発された内蔵トランスを搭載し、唯一無二の力強いGTサウンドを実現しています。また、MC昇圧トランスをヘッドシェルに内蔵したことにより、別途のMCヘッドアンプや昇圧トランスを必要とせず、アンプのMM入力にそのまま接続可能。さらには、通常のMC型カートリッジの本体部分にあたるユニットのすぐ後ろに内蔵トランスがあるため、ユニット部分がピックアップした音声信号を減衰させずに昇圧でき、一般のMC型カートリッジよりも出力が高い状態でアンプまでの信号を伝送することで、GT特有のエネルギー感を生み出しています。

Special Movie



アナログ研究・技術評論の第一人者にして、旧SPU GTおよびGTE105をご愛用の海老沢徹先生による解説動画はこちら。



SPU GTX S

出力電圧	4mV
周波数特性	20Hz-25,000Hz ±3.0dB
ダイヤモンド針	Spherical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	37g

Spherical
(丸針)



SPU GTX E

出力電圧	4mV
周波数特性	20Hz-25,000Hz ±3.0dB
ダイヤモンド針	Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	37g

Elliptical
(楕円針)



SPU GTE 105

出力電圧	4mV
周波数特性	20Hz-25,000Hz ±3.0dB
ダイヤモンド針	Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	34g

Elliptical
(楕円針)



CG 25 Di MK II / CG 65 Di MK II

真のモノラル、ここにあり

モノラルレコードには、モノラルの音溝に適したカートリッジの使用がベストです。確実にスピーカーの中心に定位する図太いサウンドの再生には、このCG 25 Di Mk IIをお勧めします。本シリーズの最大の特徴は何となくその構造と歴史にあり、そのルーツはオルトフォンが自社で開発・製造したカッターヘッドで刻んだラッカー・マスター盤を再生するため1948年に開発したType-Cという業務用カートリッジまで遡ります。このType-Cはレコード会社でプレスされたレコード盤の検聴用やラジオ放送局での再生用としても用いられていたため、当時のプレイバック・スタンダードと言っても過言ではありません。これを復刻したCG 25 Di MkIIおよびSP盤専用のCG 65 Di MkIIは、現在オルトフォンが製造する歴史的遺産の中ではSPUを超えた最古のものにあたります。

※本機はステレオ再生の規格が完成する前に基本設計が行われた製品につき、カンチレバーは左右方向にのみ動く完全なモノラル再生専用機です。ステレオ盤を再生するとトレースできずに音溝を破損する恐れがありますので、十分にご注意ください。

Special Movie



海老沢 徹 先生による
CG25 シリーズについての
解説動画はこちら。



SPU Mono G MK II

SPUをベースとした、 3mVの高出力モノラルMC

ステレオMC型カートリッジのSPUをベースとして再設計されたモノラル仕様のカートリッジです。そのためCGシリーズとは異なりカンチレバーは上下左右に動きませんが、スタイラスチップはモノラル音溝のトレースに適した半径25 μ mの丸針を採用しています。なお本機は、3mVという高い出力電圧をもつ特別な仕様となっています。これはMC昇圧トランスやMCヘッドアンプなどを使用せずにMMポジションのPHONO入りにダイレクト接続することを想定したもので、より簡便にモノラルを楽しめるように配慮されています。

Special Movie



海老沢 徹 先生による
SPU Mono シリーズについての
解説動画はこちら。



CG 25 Di MK II / CG 65 Di MK II

出力電圧	1.5mV
周波数特性	20Hz-15,000Hz +3/-1dB
ダイヤモンド針	Spherical R 25 μ m (CG25) / Spherical R 65 μ m (CG65)
カンチレバー	カッター
適正針圧	3.5g (CG25) / 4.5g (CG65)
自重	37g



SPU Mono G MK II

出力電圧	3.0mV
周波数特性	20Hz-15,000Hz +2/-1dB
ダイヤモンド針	Spherical R 25 μ m
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	4.0g
自重	30g



ボロンとシバタ。究極のMM、ついに登場

2M Black LVB 250

2020年に生誕250周年を迎えた大作曲家、ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン。彼が人類の音楽史に与えた影響は計り知れず、その偉大さから我が国では「楽聖」とも称されています。このメモリアルイヤーを記念し、オルトフォンはかの楽聖の名を冠したプレミアムモデルのMMカートリッジ2M Black LVB 250を世に送り出しました。



2M Black LVB 250 Premounted

オルトフォンのMM初、 妥協のないボロン・カンチレバー

2M Black LVB 250は、オルトフォンが誇るMMカートリッジ「2M」シリーズのフラッグシップである2M Blackをベースとしています。無垢ダイヤモンドのシバタ針に純銀メッキ高純度銅線のコイルを採用し、2Mシリーズのフラッグシップに相応しく極めて高い解像度と広いレンジを誇る、まさにHi-Fiを具現化したような存在。この2M Blackを超えるべく、LVB 250ではオルトフォン史上で初めてMM型のカンチレバーにボロンを採用、ダンパーゴムも新規に開発を行いました。これにより、ハイエンドMCカートリッジさながらのトランジェント特性(音の立ち上がり・立ち下がり)の速さ)を得ています。そのサウンドは、MMカートリッジの音に抱いていた概念を覆すほどに速く、そして自然。MMファンの方にはもちろん、MCカートリッジのユーザーにも自信を持ってお勧めしたいオルトフォンMMカートリッジの最高傑作です。



独自のスタイラス固定技術と 専用開発のダンパーゴム

ボロン・カンチレバーに無垢ダイヤモンドのシバタ針を取り付ける際には、両端を極めて高精度な垂直平面(カンチレバーの棒状部分に対して)に仕上げ、その平面部に直接スタイラスチップを固定しています。これにより、スタイラスチップの固定角度の誤差が飛躍的に小さくなり、左右チャンネルバランスやトラッキング角度の高精度化に大きく寄与しています。またカンチレバーの素材変更に伴い、これまで2M Blackで用いられていたダンパーゴムの配合比、混合物のマテリアルが見直され、LVB専用として新規開発されました。このダンパーゴムではマルチウォールカーボンナノチューブ(Multi Wall Carbon Nano Tubes、MWCNT)と呼ばれるナノメートル単位の超微小な炭素微粒子(カーボンナノフィラー)を新たに混合させることで、カンチレバーの動きやすさとゴムのダンピング性能のそれぞれが最良となるよう配慮されています。



2M Black LVB 250

出力電圧	5.0mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +2/-1dB
ダイヤモンド針	Nude Shibata

カンチレバー	ボロン
適正針圧	1.6g
自重	7.2g / 16.7g (Premounted)





レコードをいい音で聴きたい。愛聴盤をより良く鳴らす、現代型MMの決定版

2M Series

2Mシリーズの名称は、発電方式のMoving Magnet(ムービング・マグネット)=MMから採られています。「覚えやすくモダンな英数字の名称」という方針の下で、2つ並んだMで「2M」という簡潔で明瞭なシリーズ名が採用されました。また外観デザインにおいても徹底した理想の追求が行われ、著名なインダストリアルデザイナースタジオ、ミュラー・イェンセン・イノベーション&デザインの手によって「用の美」を備えたモダンなデンマーク・デザインとなりました。そして直線と平面のみを使用したシンプルな外観のフォルムは、宝石を光の屈折によって輝かせるためのファセット(切子面)から着想を得ました。オルトフォンが誇るスタイラスチップ「レプリカント100」にも似たこの姿は、ダイヤモンド針がレコード盤の音溝(グルーブ)をトレースしていく様子を表現しています。ヘッドシェル取付・リードワイヤー配線済の2M Premounted(プリマウンテッド)シリーズもラインナップしています。



2M Red Premounted

2M Red

本シリーズのエントリーモデルにあたる2M Redに対して、何よりも重視されているのはサウンドの「オルトフォンらしさ」です。エネルギッシュでありながら落ち着いた音色は、昔ながらのヨーロッパ・サウンドにも通ずるものがあります。しかし2Mシリーズには、現代の極めて高解像度なレコードも不足なく再生するという重要な使命があります。そのため、シリーズの入口にあたる2M Redであっても本体の基本構造を高性能な上級機とほぼ共通とし、スタイラスには接合式の精円針を採用しています。



2M Blue Premounted

2M Blue

2M Blueは、側面の「2M」ロゴを除き上述の2M Redと本体部分が共通です。RedとBlueの相違点は、スタイラスチップがRedの接合式精円針から無垢精円針にアップグレードされていることが挙げられます。このため、2M BlueはRedに比べレンジ感とクリアさに優れ、周波数特性も向上してよりフラットな音色となっています。

2M Redと2M Blueの交換針(スタイラス)互換について

2M Redと2M Blueのカートリッジ本体には互換性があります。2M Redを使用している場合は2M Blueの交換針(スタイラス)であるStylus 2M Blueに挿し換えることで、簡単にアップグレードを行うことができます。

※MM型カートリッジは針先(スタイラス/交換針)をご自身で交換することが可能です。詳細は本誌P.46-47をご参照下さい。



2M Bronze Premounted



2M Black Premounted

2M Bronze

2M Bronzeは、先述の2機種を更に高性能化させるべくスタイラスチップに無垢のファインライン針(高性能な精円針の一種)を採用しています。カートリッジ本体も上級ライン仕様となり、マグネットやコイルを含む磁気回路がアップグレードされています。ワイドレンジでありながらタッチの柔らかなサウンドは、Bronze独特のものです。

2M Black

2Mシリーズの頂点となるべく開発された2M Blackは、高性能な無垢シバタ針の採用によりBronzeを超えた高解像度・ワイドレンジを実現しています。また、2M Blackはアルミカンチレバーを採用しているため、ポロンのカンチレバーを採用したフラッグシップモデルの2M Black LVB 250に比べるとやや音色が柔らかい傾向にあります。そして2M BronzeおよびBlack、Black LVB 250本体内部のコイルには高純度な銀メッキ銅線を採用しています。よってこの3機種は煌びやかでありながらニュートラルな、上位モデルに相応しい高品位なサウンドとなっています。

2M Bronzeと2M Blackの交換針(スタイラス)互換について

2M Bronzeと2M Blackシリーズのカートリッジ本体には互換性があります。2M Bronzeを使用している場合は2M Black/Black LVB 250の交換針(スタイラス)であるStylus 2M Black/Black LVB 250に挿し換えることで、簡単にアップグレードを行うことができます。

※MM型カートリッジは針先(スタイラス/交換針)をご自身で交換することが可能です。詳細は本誌P.46-47をご参照下さい。



2M Mono Premounted



2M 78 Premounted

2M Mono

モノラルレコード用MMカートリッジの2M Monoは、いまだ根強い人気を誇るモノラル録音を可能な限り簡便に、かつ高音質で再生することを目指して開発されました。あえてスタイラスチップに無垢ダイヤモンドの丸針を使用することで、モノラル盤の魅力をより忠実にピックアップすることが可能です。

2M 78

SPレコードの再生用として開発されたMMカートリッジです。蓄音機の時代から存在するSPレコードはLPよりもはるかに溝が太く、一般的なLP用のカートリッジでは再生することができません。2M 78はSPレコード専用となるスタイラスチップを備えているため、極めて高音質なSPレコード再生を行うことができます。

2M Monoと2M 78の交換針(スタイラス)互換について

2M Monoと2M 78は、針先のスタイラスユニット(交換針)の違いのみで本体部分は共通です。そのため、2M Monoの交換針(スタイラス)Stylus 2M MonoをSP盤用のStylus 2M 78に挿し換えることで、事実上ほぼ全てのモノラルレコードを楽しむことが可能となります。

※MM型カートリッジは針先(スタイラス/交換針)をご自身で交換することが可能です。詳細は本誌P.46-47をご参照下さい。

	2M Red	2M Blue	2M Bronze	2M Black	2M Mono	2M 78
出力電圧	5.5mV	5.5mV	5.0mV	5.0mV	4.0mV	4.0mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +3/-1dB	20Hz-20,000Hz +2/-1dB	20Hz-20,000Hz +2/-0dB	20Hz-20,000Hz +2/-0dB	20Hz-20,000Hz +3/-1dB	20Hz-20,000Hz +3/-1dB
ダイヤモンド針	Elliptical	Nude Elliptical	Nude Fine Line	Nude Shibata	Nude Spherical	Spherical
カンチレバー	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム
適正針圧	1.8g	1.8g	1.5g	1.5g	1.8g	1.8g
自重	7.2g / 16.7g (Premounted)	7.2g / 16.7g (Premounted)	7.2g / 16.7g (Premounted)	7.2g / 16.7g (Premounted)	7.2g / 16.7g (Premounted)	7.2g / 16.7g (Premounted)
詳細情報						
Premounted						



Concorde再び原点へ。軽質量MMの理想を具現化した「Music」、ついに登場

Concorde Music Series

かの超音速旅客機に似たフォルムが特徴的な、オルトフォンのConcorde。この特異なカートリッジが誕生した1979年当時、カートリッジの多くはローマス(軽質量)・ハイコンプライアンス(針先が動きやすい)を至上命題として開発されており、カートリッジ、トーンアームともに現代の一般的なそれよりも更に高感度であることを求められていました。これを極限まで追求した時、理想的な形状として誕生したのがConcordeのシェル一体型ボディです。高感度トーンアームとの相性の良さ、色づけない「正確 (Accuracy)」な音色を特徴とし、他のカートリッジにみられない強烈な個性を有するConcordeシリーズ。Hi-Fiカートリッジのラインナップとして、圧倒的な進歩を遂げた現代技術と、より洗練された自社のダンパー技術の全てを注ぎ込むことで、21世紀の「正確」なサウンドを再定義することに成功しました。

上位グレードに統一された、全機種共通の一体型ボディ

精悍なマットブラックを纏ったConcorde Musicシリーズのボディは、最上位のBlackからエントリーモデルのRedに至るまで全て共通です。これはシリーズ各機種のスタイラス(交換針)が互換性を持ち、これを挿し換えることで容易にアップグレード可能であることを意味しています。そしてボディ側先端にあるスタイラス装着部分には、意図的な着脱時以外には抜け止めとして機能するロック機構が設けられています。旧シリーズには存在しなかったこの画期的な機構は、単にロックとして機能するだけでなく、スタイラスが定位置に装着されると認識できることも目標として開発されています。既に装着されているスタイラスを抜き取り、別のスタイラスを装着すると「パチッ」というクリック音を生じさせることで、機構上とフィーリング双方でのスタイラスの確実な装着を実現しています。さらに、旧Concordeシリーズでは、折損時の修理が不可能であったフィンガー(指かけ)部分は、交換用の機構を新たに設け、差し換え可能となりました。そしてボディ内部にはオルトフォンが誇る独自のMM型用磁気回路が備えられ、4本のスプリット・ポールピン(Split Pole Pins)に巻かれたコイル巻線は全ての機種で銀メッキ高純度銅線を採用。これまで、MM型カートリッジでは上位モデルにのみこの線材が用いられてきましたが、Concorde Musicシリーズではコスト面を無視し、全機種での採用に踏み切りました。ちなみに、Musicを含むConcordeシリーズはテーパー(先細り)型のヘッドシェル一体構造を特徴としています。



Concorde Music Red

Concorde Musicシリーズのエントリーモデルながらスタイラスチップには高性能な楕円針を、そしてコイル巻線には上位モデルと共通の銀メッキ高純度銅線を採用しており、この価格帯のMM型Hi-Fi用カートリッジとしては非常にコストパフォーマンスに優れたモデルとなっています。エネルギーが持つホットな音色でありながら銀メッキ線由来のほど良い煌びやかさをもった高音域を特徴とし、オルトフォンの理想とするサウンドを存分にご堪能頂けるカートリッジです。



Concorde Music Blue

エントリーモデルのRedをアップグレードさせたモデルで、スタイラスチップには無垢ダイヤモンドの楕円針を採用。振動系部分の実効質量が小さくなり、針先の動作能力が向上しています。更に接合針に存在していたスタイラス部分の介在物が無くなったことで音声信号の伝達速度が上がり、音溝から音声信号を精緻かつ正確にピックアップすることを可能としています。Redの音色に、更なるクリアさ・ワイドレンジ感を求める場合に最適です。



Concorde Music Bronze

Bronzeのスタイラスチップには、かつてのハイエンドモデルであるConcorde MC200やConcorde 30にも使用された高性能な楕円針の一種、無垢のファイナラインを採用。そのため、Red・Blueよりも更にピックアップ能力が向上しており、シルキーで滑らか、かつ繊細な音色を身上とするカートリッジです。



Concorde Music Black

Bronzeの上位モデルであるBlackでは、スタイラスチップにラインコンタクト針の一種、シバタ針を採用しています。そのため、ファイナラインを用いたBronze以上に高解像度かつクリアなサウンドを誇りますが、王道のアルミニウム製カンチレバーを使用することで、程よいしなやかさも持ち味としています。

Concorde Music Black LVB 250



2M Black LVB 250を元に、Musicシリーズのフラッグシップとして新規に開発されたモデル。ダイヤモンドに次ぐ音の伝達速度を誇り、トランジェント特性に優れたボロン素材のカンチレバー、無垢ダイヤモンドのシバタ針、そしてマルチウォールカーボン・ナノチューブ(Multi Wall Carbon Nano Tubes、MWCNT)を配合した本機専用のダンパーゴムという、MM型ではLVB 250のみで採用した珠玉のテクノロジーを惜しむことなく用いています。

※Concorde MusicシリーズはMM型カートリッジにつき、ボディに装着されたスタイラス(交換針)部分をユーザー様ご自身で交換することができます。また、本シリーズにはカートリッジ本体部分に互換性があり、Red・Blue・Bronze・Black・Black LVB 250各機種の本体部分には全て共通です。詳細はP.46-47をご参照下さい。

	Concorde Music Red	Concorde Music Blue	Concorde Music Bronze	Concorde Music Black	Concorde Music Black LVB 250
出力電圧	6mV	6mV	6mV	6mV	6mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +3/-1dB	20Hz-20,000Hz +2/-1dB	20Hz-20,000Hz +2/-0dB	20Hz-20,000Hz +2/-0dB	20Hz-20,000Hz +2/-0dB
ダイヤモンド針	Elliptical	Nude Elliptical	Nude Fine Line	Nude Shibata	Nude Shibata
カンチレバー	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	ボロン
適正針圧	1.8g	1.8g	1.8g	1.8g	1.8g
自重	18g	18g	18g	18g	18g
詳細情報	Elliptical (楕円針)	Elliptical (楕円針)	Fine Line (ファイナライン)	Shibata (シバタ)	Shibata (シバタ)



Concordeのエントリーモデルにしてオリジン、ここに誕生



全てのレコードリスナーに向けた、軽質量なMM型カートリッジ

Concorde 5 Series

ヘッドシェルとカートリッジ本体を一体型としたConcordeシリーズの優れた素質をそのままに、かつリーズナブルなエントリーモデルとして誕生したのがConcorde 5シリーズです。丸針の5Sと楕円針の5Eの2モデルをラインナップし、スタイラス(交換針)はS・E双方に互換性をもたせ、挿し替えを可能としました。コストパフォーマンスに優れ、ヘッドシェルの取付やリードワイヤーの配線などを行わずに高音質なレコード再生を楽しめるConcorde 5シリーズは、レコードやオーディオの趣味を始めたばかりのビギナーの皆様にも、自信をもってお勧めできるカートリッジです。また本シリーズは原型モデルの性質を色濃く残しているため、往年のオリジンたちを記憶に留めているベテランの皆様にも、あわせてお勧めしたい逸品です。



Concorde 5S

スタイラスチップを接合式の丸針としたエントリーモデルで、丸針特有の独特な中音域の厚みを特徴とします。また、カートリッジやトーンアームのセッティングを極めてシビアに追い込まずとも安定したレコード再生を可能とするため、レコードに初めて触れる皆様やヴァイナルを愛好する音楽ファンの皆様にお勧めしたいモデルです。

Concorde 5E

スタイラスチップに接合式楕円針を採用しています。丸針モデルのConcorde 5Sと比較するとレコード盤の音溝表面に刻まれた音声信号をより細かくピックアップ(拾い上げ)することが可能で、5Sに比べワイドレンジでクリアな音色を特徴とします。またトーンアームのセッティングをある程度緻密に行うことで、そうでない場合よりも音色のクオリティ向上を実感しやすいモデルです。

Concorde 5S	
出力電圧	4.5mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±3dB
ダイヤモンド針	Spherical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	1.8g
自重	18.5g



Concorde 5E	
出力電圧	4mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz ±3dB
ダイヤモンド針	Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	1.8g
自重	18.5g



※MM型カートリッジは針先(スタイラス/交換針)をご自身で交換することが可能です。詳細は本誌P.46-47をご参照下さい。

OM 5 Series

ローマンス・カートリッジの系譜を最も色濃く受け継いだMM型カートリッジのOM 5シリーズは、Super OM 5E(楕円針)を筆頭とし、シリーズ内では同モデルにのみコスト度外視のハイグレードなハウジング素材や磁気回路を用いました。その一方で、基本的な設計思想を徹底させることで性能を保持しつつ、コストパフォーマンスに優れたエントリーモデルのOM 5E(楕円針)、OM 5S(丸針)とあわせて3モデルのラインナップを構成しています。Hi-Fiを志向するオーディオファンの皆様はもちろん、ヴァイナル・レコードを愛してやまないレコードリスナーの皆様が音楽だけに没入するためのカートリッジとしても最適なパフォーマンスを誇ります。



OM 5S

スタイラスチップを接合式の丸針としたOM 5シリーズのエントリーモデル。4.5mVの出力電圧により、シリーズ随一のエネルギーを誇ります。また丸針を用いたカートリッジに特有な、独特な中音域の厚みが特徴です。

OM 5E

出力電圧は4mV、接合式楕円針を用いたモデルです。丸針モデルのOM 5Sと比較するとレコード盤の音溝表面に刻まれた凹凸状の音声信号をより細かくピックアップ(拾い上げ)することを可能とし、高音域の再生能力向上と歪みの低減を実現しています。そのため、丸針モデルのOM 5Sに比べワイドレンジでクリアな音色となる傾向にあります。

Super OM 5E

出力電圧はOM 5Eと同じく4mVですが、「Super」を冠する本機のみ上位モデルの2M Seriesと同様、スプリット・ポールピン(Split Pole Pins)を使用した高性能な磁気回路を搭載しており、OM 5Sおよび5Eに比べ高域方向への周波数特性が向上。高音域の表現力や左右チャンネルの定位感が更にランクアップしています。

OM 5S	
出力電圧	4.5mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +/-3 dB
ダイヤモンド針	Spherical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	1.75g
自重	5g



OM 5E	
出力電圧	4.0mV
周波数特性	20Hz-20,000Hz +/-3 dB
ダイヤモンド針	Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	1.75g
自重	5g



Super OM 5E	
出力電圧	4.0mV
周波数特性	20Hz-22,000Hz +/-3 dB
ダイヤモンド針	Elliptical
カンチレバー	アルミニウム
適正針圧	1.75g
自重	5g



※MM型カートリッジは針先(スタイラス/交換針)をご自身で交換することが可能です。詳細は本誌P.46-47をご参照下さい。



AS-212R/AS-309R

「R」は Reference。スタティック・バランス型トーンアームの決定版

オルトフォンは、業務用として生まれた高性能な自社カートリッジの検聴や音楽再生を行うためにスタートさせたトーンアームの開発や生産も古くから行っています。1950年代に初のトーンアームを開発して以来、スタティック・バランス型のSMGシリーズ、またダイナミック・バランス型の銘機として今なお名高いRMA/RMGシリーズやRFシリーズなどの様々な製品を生み出してきました。これらに続いて誕生したASシリーズは、アーム本体にレストやリフターを備えた現代の標準的なスタティック・バランス型トーンアームとして誕生し、9インチショートモデルの「212」と12インチロングモデルの「309」をラインナップしながらモデルチェンジを重ねて現代に至ります。

このスタイルを踏襲しつつ新たに開発された本シリーズは、製品コンセプトをReference(リファレンス)と定め、数多あるトーンアームの基準器となるような精度と堅牢さ、またこれらに支えられて現れる「正統な音」によって、レコード盤の音溝からカートリッジがピックアップした音声信号をよりハイ・フィディリティ(Hi-Fi、高忠実度)なままに伝送させることを目指し、現実のものとなりました。

歴代シリーズで培われた知見の全てを活用したことでオルトフォン史上最高のトーンアームとなったAS-212R/AS-309Rは、「Reference」の名そのままにカートリッジと愛聴盤の魅力を最大限に引き出します。高精度、堅牢、そして手になじむ使いやすさ。業務用モデルから連綿と続く、オルトフォンのトーンアームに通底する理念は「Reference」にも受け継がれています。

新装成った、伝統のASシリーズ

オルトフォンのスタティック・バランス型トーンアームは、1970年代に発表された初代 AS-212 以来、代々「AS」の型番を冠しています。この AS-212 や続く AS-212 MkII はアンチスケエティングやアームリフターを備え、かつスタティック・バランス型アームの感度を活かして当時主流であった軽質量カートリッジの再生を念頭としていました。しかし時代の変遷とともに、AS シリーズを用いた重質量カートリッジの再生も望まれるようになります。オルトフォンはこれに応え、続くモデルではアーム本体の高剛性化を行い、重量級カートリッジの使用にも耐えられる堅牢な仕様を追求しています。そしてこの AS-212R/AS-309R では SPU シリーズや Concorde シリーズの使用を想定して針先→シェル後端の長さを 52mm 設定とし、また差換式のヘッドシェルとカートリッジの合計自重が 30g を超える重質量カートリッジの再生にも対応。そして、アームパイプの角度と再生時の針先位置を IEC の推奨する Baerwald (Baerwald) ・アライメントに準拠させています。

取り扱いの容易な、スタティック・バランス型トーンアーム

AS-212R/AS-309Rは、取り扱いが容易でシンプルなスタティック・バランス型の針圧加圧機構を採用しています。ユニバーサル型のヘッドシェルコネクターにカートリッジを取り付け、ゼロバランスを取ってから針圧を加圧、そしてアンチスケエティングを調整した後にレコード盤へと針を下ろす。新たなASシリーズは、我々の体に染み付いた一連の操作を行うだけで高品位なレコード再生を可能とするトーンアームです。

Special Movie



アナログ研究・技術評論の第一人者、海老沢 徹 先生によるトーンアームの特徴や針圧加圧機構についての解説動画です。



アルミ製アームパイプの採用

シンプルなスタティック・バランス型の構造と、高精度なピボット(円錐形の回転軸)およびベアリングの採用によって実現した高感度を十全に生かすため、AS-212R/AS-309RのS字型アームパイプやハウジングケースなどの可動部には真鍮やステンレスよりも軽質量で固有の付帯音が少ないアルミニウムを使用しています。そのため重質量な金属素材を用いた製品よりもアームパイプを含む可動部が軽質量化されており、特にMM型に多い軽針圧・軽質量なカートリッジの再生も考慮した仕様となっています。



高精度な真鍮切削部材を多用し、適切な質量配分を行った機構部分

先に述べた通り、本シリーズではアームパイプやハウジングケースに軽質量なアルミを採用しています。そのため、アームパイプを含む可動部はほどよく軽量化されています。このような可動部の軽質量化は高性能なトーンアームの設計を行う上で極めて重要ではありますが、そのみを是として極端な軽量化に走ると使用可能なカートリッジの選択肢を狭め、結果として軽質量・軽針圧なカートリッジ専用のトーンアームになってしまう恐れがあります。しかしながら「オルトフォンのトーンアーム」である以上、SPUに代表される重質量・重針圧なカートリッジが使用可能という期待を避けて通ることはできません。この相反する要素の両立という難問に対し、オルトフォンが出した答えは各パーツの素材を使い分け、動作時の質量を適切に配分することでした。ピボットやベアリングを組み込んでアーム中心部の支点を構成する軸受パーツや、これらの動作機構部分とリフター、レスト、アンチスケエティングをプレーヤーに固定している基部およびシャフト部分には剛性に優れた真鍮の切削材を使用。動作機構の中心部と基部であるベース部分では逆に質量のある素材を用いてリジッドで強固な土台を形成したことで、再生音の安定感を向上させ、同時に低音域の解像度も飛躍的に向上させています。そして動作時の質量配分に際して最大の要となるカウンターウェイトは軽・中質量用(カートリッジとヘッドシェルの合計自重18~26g)と重質量用(同26~38g)の2個を製品に付属させ、それぞれをカートリッジの自重にあわせて挿し替える方式を採用しています。

その一方で、アームパイプ先端のシェルコネクター素材はあえてアルミではなく真鍮としました。頻繁なヘッドシェルの挿抜に伴う摩擦を避け、コネクターの機械的寿命を延ばすためにはこれが最良であるという判断に至ったためです。その代わり、コネクターの黒いロックナット部分では表面のローレットを細かく彫り、本来の滑り止めとしての役目を更に十全としてグリップ感を向上させつつ部材の肉抜きも兼ねさせることで、強度を保ちながら可能な限りの軽量化を図っています。そして、ロックナットとハウジング、ウェイトシャフト、カウンターウェイトの表面には美しいブラックのマットクロームメッキ加工を施し、シンプルで落ち着いたモノトーンカラーとしました。



低音域での共振を防止するためのダンピング・システム

AS-212R/AS-309Rのカウンターウェイトを取り付けるウェイトシャフト基部には、低音域で発生しうる部分共振への対策としてダンピング用のラバージョイントが組み込まれています。このジョイントでアーム本体からウェイトシャフトを浮遊させ、部分共振を抑えることでハウジング対策をより強固なものとし、またそれに伴うS/N感の向上をもたらしています。

AS-212R

アーム軸中心→センタースピンドル	214mm	アームシャフト用穴径の推奨値	22mm
オーバーハング	18mm	アームベース固定ネジの位置	ベース中心から直径40mm地点、3本分を120°で等分
オフセットアングル	23.75°	針圧対応範囲	0~4g
スタイラスポイント→シェル後端	52mm	カートリッジ対応自重	18~26g(標準ウェイト時、シェル含む) 26~38g(重質量ウェイト時、シェル含む)
トーンアーム・ジオメトリ	Baerwald alignment(IEC推奨、ヌルポイントは66および120.9mm)	本体重量	600g(標準ウェイト時)/630g(重質量ウェイト時)
アームシャフト直径	18mm		

AS-309R

アーム軸中心→センタースピンドル	311mm	アームシャフト用穴径の推奨値	22mm
オーバーハング	12.5mm	アームベース固定ネジの位置	ベース中心から直径40mm地点、3本分を120°で等分
オフセットアングル	16.75°	針圧対応範囲	0~4g
スタイラスポイント→シェル後端	52mm	カートリッジ対応自重	18~26g(標準ウェイト時、シェル含む) 26~38g(重質量ウェイト時、シェル含む)
トーンアーム・ジオメトリ	Baerwald alignment(IEC推奨、ヌルポイントは66および120.9mm)	本体重量	680g(標準ウェイト時)/730g(重質量ウェイト時)
アームシャフト直径	18mm		

※AS-212/309Rにヘッドシェルは付属していません。本誌P.40などをご参照の上、別途ご用意下さい。





6NX-TSW1010

完璧なシールドと純粋な伝送。
これがフォノケーブルの理想

オルトフォンの考えるフォノケーブルの理想は、「完璧なシールド」「信号の純粋伝送」「使用環境に対して幅広く対応すること」です。6NX-TSW1010シリーズはL/Rチャンネル線の外周に更にもう一重、信号線から完全に独立したシールドラインを設けたダブルシールド方式を採用することで、高品位なアナログ再生の天敵である誘導ノイズを強力にシャットアウトすることに成功。また、6N高純度銅線とOFCを独自のブレンドでハイブリッドした高品位な導体は、カートリッジがピックアップした微細な信号を減衰させることなく伝送

します。そして端子接点は肉厚のロジウムメッキを施すことで、アナログ再生にありがちな接触不良が発生する可能性を大きく低減させました。なお、アナログプレーヤーおよび周辺の再生機器には様々な接続端子があり、環境も千差万別です。オルトフォンはこれを鑑み、フォノ5ピン/RCA端子を使用したスタンダードタイプの本機に加え、様々な状況に対応した1.2mのフォノケーブルをご用意しております。



6NX-TSW1010R

ケーブル両端にRCA端子とアース線を装備したモデル。多くのSMEアームやRCAジャック装備のプレイヤー、MCTランス→PHONO入力間などに使用可能です。



6NX-TSW1010L

L字型のフォノ5ピン/RCA端子を装備したモデル。キャビネットが薄く、スタンダードタイプの使用が困難なプレイヤーに適しております。



6NX-TSW1010B

フォノ5ピン/XLR端子を装備する、完全バランス伝送を実現したフォノケーブルです。バランス入力が可能なMCTランス/フォノイコライザーに対してご使用ください。

6NX-TSW1010 / 6NX-TSW1010R / 6NX-TSW1010L / 6NX-TSW1010B

導体種類	6N高純度銅線、OFC	耐電圧	AC500/1分間
導体面積	2×0.37mm ²	シールド	16/8/0.1
ケーブル径	Φ10mm	絶縁抵抗	2000mΩ/m以上
端子メッキ	金メッキ / ロジウムメッキ	絶縁材	ポリエチレン、PVC
導体抵抗	48mΩ/m以下	長さ	1.2m



LW-800S

アナログ再生の要。
盤と針のクオリティを最高に引き出すリードワイヤー

アナログカートリッジの出力電圧は約0.2mVから5mV程度まで幅広く範囲がありますが、微細なものには変わりありません。このため、リードワイヤーに高純度・高品位な導体を用いて信号を純粋伝送することが非常に重要となります。約四半世紀前、ケーブルブームの黎明期にオルトフォンが発表した「7N・LW1」と「8N・LW10」は、その音質に対する絶大な効果により

リードワイヤーの枠内にとどまらず、オーディオケーブル全体の導体高純度化、また種類の多様化をもたらす画期的な製品となりました。この後継機となる現行LWシリーズは、純銀線Φ0.26mm×3本に銀メッキ銅線Φ0.1mm×16本を使用し極めてクリアかつ銀特有の煌きを持ったサウンドのLW-800Sをはじめ、合計4種類のラインナップを取り揃えております。



LW-7N

7N高純度銅線Φ0.26mm×3本に6N高純度銅線Φ0.1mm×16本を使用した、フラットで癖のない音色は高品位なりファレンスサウンドにうってつけです。



LW-6N

6N高純度銅線Φ0.18mm×7本にOFCΦ0.1mm×17本を使用、導体を絶妙にブレンドすることで高解像度とエネルギー感を両立させました。



LW-3C

新素材PC-Triple CをΦ0.12mm×19本とΦ0.08mm×24本使用、廉価ながら極めて高い解像度、情報量を誇ります。

	LW-800S	LW-7N	LW-6N	LW-3C
端子	ロジウムメッキ	ロジウムメッキ	金メッキ	金メッキ
導体	ハイブリッド高純度銀線	ハイブリッド高純度無酸素銅線	ハイブリッド高純度無酸素銅線	PC-Triple C
ケーブル長	35mm	35mm	35mm	35mm
詳細情報				

【動画】
リードワイヤー
の取付方法





EQA-444

MC・MMワンタッチ切替。 オルトフォンが誇る、高品位フォノイコライザーアンプ

EQA-444は、小型かつ高音質、さらにMC/MM両用可能でコストパフォーマンスに優れた次世代のフォノイコライザーアンプを生み出すべく、デンマークのオルトフォン本社の全面的な技術協力を受けて開発されました。



コンパクトながら高品位。 大口径ケーブルにも対応

NF型イコライザー回路には高品質・高精度なオーディオグレードのパーツを採用し、音楽信号 IN/OUT の RCA ジャックはシャーシに直接取り付けられた金メッキタイプのものが十分に間隔を空けて配置されているため、大型・大口径化した昨今の音響用ケーブルのプラグにも余裕をもって対応することが可能です。



EQA-444

入力感度/インピーダンス MC	250 μ V/100 Ω	本体寸法 W/H/D	142/48.5/113(mm) ツマミ端子含む:142/48.5/119(mm)
入力感度/インピーダンス MM	2.5mV/47k Ω	自重	980g



MC型の魅力を一層高める、珠玉の昇圧トランスたち

ST-90

ST-90のトランスユニットは透磁率の高い高性能パーマロイを採用し、ワイドレンジかつフラットな周波数特性を得ており、高性能パーマロイのコアに一次二次巻き線ともバランス入力・出力が可能な巻き方としています。また左右チャンネル独立のパーマロイ・ハウジングによる磁気シールドを施しているうえ、堅牢なアルミニウムのケースに収納することにより、外部ノイズの影響を極限まで排除しています。本機の入出力端子には完全バランス仕様のXLR端子を装備しています。無論、一般的なRCA端子による接続も入出力ともに可能です。筐体全体に2.3mm厚の鋼板を使用した安定感のある堅牢なボディは、外部振動にも強い構造となっています。信号系配線材にはクリアな音が評判の6N高純度銅の単芯線材を贅沢に使用。強固なボディと厚手のフロントパネルはデザインからも高級感を追求し、パフォーマンスの良い仕様が実現しました。



ST-70

圧倒的なトランジェント特性を持つオルトフォンのハイエンドMCの性能を遺憾なく発揮するべく、スウェーデンが誇る高品質トランスメーカー「Lundahl」社製のオルトフォン専用特注トランスユニットを搭載したMC昇圧トランスを開発。ST-90やST-7とはまた異なる、極めて繊細にして透明なサウンドを実現したトランスが誕生しました。ST-70は、オルトフォンが100年をかけて生み出した新時代の高性能MCカートリッジにベストマッチしていることは言うまでもなく、癖のない、繊細でクリアなサウンドを目指した音づくりにより、様々なMCカートリッジに広く対応したMC昇圧トランスとなっています。



【動画】インピーダンスの切替方法



ST-7

内部トランスの巻線をサンドウィッチ巻構造とすることで、高域特性が向上し、非常にクリアでワイドレンジなサウンドを実現。また、高品質パーマロイコアと左右チャンネルそれぞれに独立しているパーマロイのシールド・ハウジングケースを採用し、筐体の大型化・重量化によって制振能力も向上。外部からのノイズ・振動をシャットアウトすることで再生音の安定感に優れたトランスです。



	ST-90	ST-70	ST-7
昇圧比	24dB	設定A:24dB 設定B:30dB - 工場出荷時設定	24dB
対応インピーダンス	2 Ω ~60 Ω	設定A:5 Ω ~50 Ω 設定B:10 Ω 以下 - 工場出荷時設定	2 Ω ~60 Ω
本体寸法 W/H/D	165/115/108:(119D端子)(mm)	150/58/135(mm)	122/43.5/102(mm)
自重	2.17kg	1.233kg	790g
詳細情報			

シェルの必須条件は、音の良さと使いやすさ



LH-10000

オルトフォンのヘッドシェルのフラッグシップモデル。アルミニウムと亜鉛の合金シェルに、独自開発したTPE（サーモ・プラスチック・エラストマー）コンパウンドを挿入した新しいアイデアのヘッドシェルです。

※以下モデルにのみ対応している専用設計です。
MC Diamond/MC Verismo/The MC Century/MC Anna/MC Anna Diamond/MC A90/MC A95/MC A Mono/MC 90X/MC Windfeld/MC Windfeld Ti/MC Cadenza Series/MC Jubilee/MC Kontrapunkt Series



LH-9000

シェル本体をアルミニウム材から削り出し、裏面にカーボンクロスを配したハイブリッド仕様。ダンピングを効かせ、いわゆる金属の「鳴き」を排除して音の透明感を高めています。



LH-6000

アルミブロックからの削り出し。MC Windfeld Ti、MC Cadenza Series等のカートリッジの形状に合わせたシェルで、美しいフォルムです。



LH-4000

シェル本体とカートリッジのマウント可能サイズを大きくすることで、オルトフォンのみならず様々な種類のカートリッジの取付を可能にしました。付属の六角レンチによりラテラル調整が可能となっています。



LH-2000

アルミ削り出しによる贅沢な肉厚をもった構造にシンプルなデザイン。その安定した音質は多くの支持を得て、ロングセラーとなっています。



SH-2

特殊ファイバー配合の樹脂を成型したヘッドシェル。軽量・高剛性でニュートラルな音色と、Hi-Fi用途のみならずDJやリスニングの用途にも適した操作性のよさが特徴です。

	LH-10000	LH-9000	LH-6000	LH-4000	LH-2000	SH-2
端子	金メッキ	金メッキ	金メッキ	金メッキ	金メッキ	金メッキ
本体材質	アルミニウム+亜鉛+TPE	アルミニウム+カーボンクロス	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム
自重	14.5g(目安値、取付ネジ除く)	16.8g(目安値、取付ネジ除く)	13.5g(目安値、取付ネジ除く)	14.3g(目安値、取付ネジ除く)	15.5g(目安値、取付ネジ除く)	9.3g(目安値、取付ネジ除く)
詳細情報						

アナログライフの必需品。 レコード再生のクオリティを支える多彩なアクセサリ



DS-3

精密小型デジタル針圧計です。計測範囲0.01g-200g。バックライト付きの大きな文字盤。針を載せるプレートが横になっています。単4型電池仕様。



SCK-2

カートリッジを2個収納できる専用ケース。軽量で剛性の高いアルミフライトケースに固定用の専用金具とウレタンフォームを組み合わせた、保管や移動に最適な仕様です。



CK-1

カートリッジを最大限に「魅せる」ディスプレイを可能とした、アナログファン必須のスタンド型キーパーです。



APJ-1

オルトフォンのAシェルカートリッジを使用する場合、長さが短いためアダプターが必要になります。トーンアームの先端に付けたスタイラス(針先)が所定の位置にくるように設計されています。



OP-1200-SPU

SL-1200シリーズでSPUを使用するためのサブウェイト。本体は二分割式の真鍮切削加工となっています。



Record stabilizer

Black/Silverのカラーバリエーションを備えるとともに、様々なプレーヤーでの使用を想定して自重240gのスタンダードモデルと自重350gの「Heavy」モデルの2種類をラインナップ。

Record Brush

「用の美」を極めたフォルムは、デンマークの著名なインダストリアルデザイナースタジオ、ミュラー・イェンセン・イノベーション&デザインによるものです。2列に埋め込まれた細いカーボンファイバーのブラシが盤面をなぞることで汚れやホコリをダブルキャッチ。音溝の隅々に至るまで効果的にクリーニングすることが可能です。



TEST RECORD

デンマーク本社の開発陣がカートリッジの完璧な検査を行うために、盤面のデザインからレコードの内容に至るまで徹底的にこだわって誕生したテストレコードです。

	DS-3	SCK-2	CK-1	APJ-1	OP-1200-SPU	Record stabilizer	TEST RECORD	Record Brush
材質	合成樹脂+ステンレス	アルミニウム+ウレタン	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム	アルミニウム		
本体寸法 W/H/D	93/17/115(mm)	162/43/122(mm)	—	Φ13.8、 全長32.5mm(端子含む)	15~18mm	—		
自重	115.5g	220g	—	6.5g	—	240g/350g		
詳細情報								

Cartridge

—カートリッジの構造と使い方—

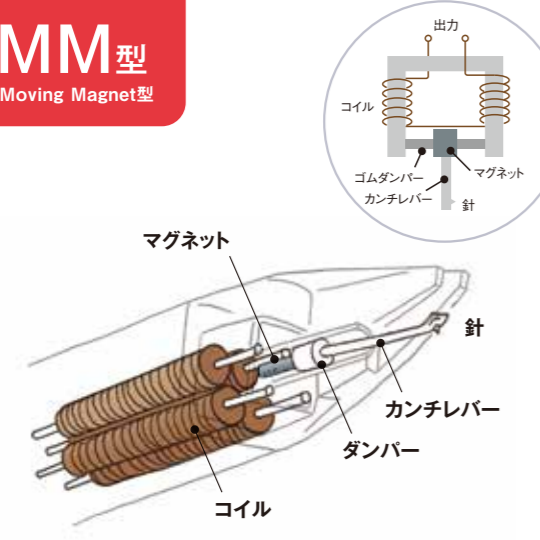
カートリッジはレコードの音溝から拾った振動を電気信号に変換するもので、様々な素材や形状が存在し、それによって音質にも大きな差が生まれます。発電方式の違いによって主に「MM型」と「MC型」に分かれ、オルトフォンはいずれの方式も幅広くラインナップしています。

カートリッジの種類

ダイヤモンドの針先(スタイラス)がレコードから拾った振動は、まずカンチレバーに伝わり、その後マグネットまたはコイルが振動して電圧を生みます。ムービング・マグネット(MM)とムービング・コイル(MC)という名の通り、出力電圧を生むために動く部分の構造が異なります。

MM型

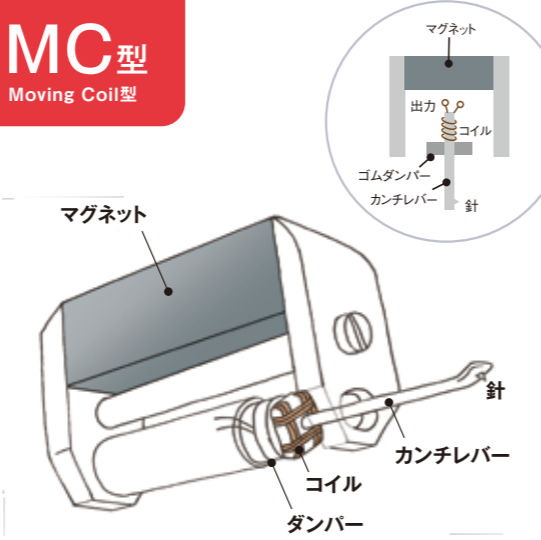
Moving Magnet型



出力が高く、そのままアンプのフォノ入力に接続が可能。シンプルな構造で針先部分を自分で交換することができる。入門者でも扱いやすい。

MC型

Moving Coil型

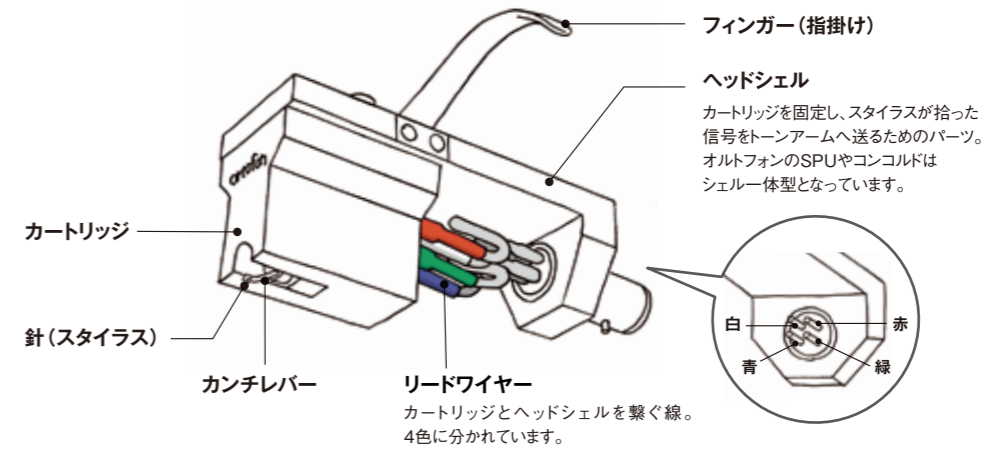


構造が複雑かつ精度も高いので、高級なものが多い。レスポンスが良くレンジも広い。低出力のため昇圧トランスやヘッドアンプが必要。針交換はメーカー修理が必要。

※修理時は「針交換」と呼ばれる本体交換か、機種によってはデンマーク本社工場にて分解修理を実施。(本誌P.46-47参照)

カートリッジの構造

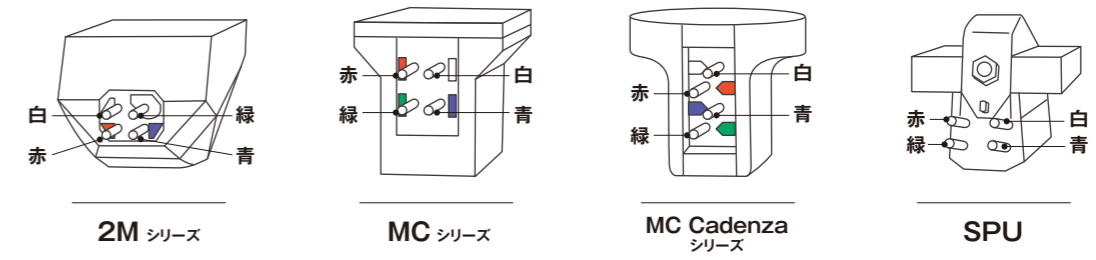
カートリッジはレコードの溝から音を拾う針(スタイラス)、その振動を伝えるカンチレバー、それを保持するダンパーで構成され、素材や機構によって音質が異なります。また、針先の形状にも丸針(Spherical)、楕円針(Elliptical)、ラインコンタクト針などが存在し、再生能力やトレース能力が変わります。



カートリッジの取り付けとリードワイヤー配線

カートリッジの背面には、ヘッドシエルのリードワイヤーと同じ4色の端子が備えられています。色を間違えないように挿しこみ、ネジでカートリッジとヘッドシェルを固定します。リードワイヤーはシェル側とカートリッジ側で太さが異なる場合がありますのでご注意ください。なお、SPU*やConcordeシリーズはヘッドシェル一体型につき、取付作業は必要ありません。*SPU Royal N をのぞく

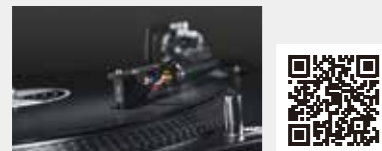
<カートリッジ 背面図>



Special WEB Contents 「アナログオーディオ大全」

はじめてのレコード再生・機材編

レコード再生を始める際に不可欠な、最も基礎的な内容をご紹介します。



はじめてのレコード再生・操作編 Vol.1

レコードを聴く際に必要な機器のセッティングや操作方法をご紹介します。



はじめてのレコード再生・操作編 Vol.2

レコード盤の扱い方から針の下ろし方についてご紹介しています。



レコード針のヘッドシェル取り付け方法

ヘッドシェルを必要としない、ヘッドシェルとアームパイプ一体型アームへの取付方法もご紹介しています。



リードワイヤーの交換方法について

アナログ再生の音質向上の第一歩となる、リードワイヤーの交換方法をご紹介します。



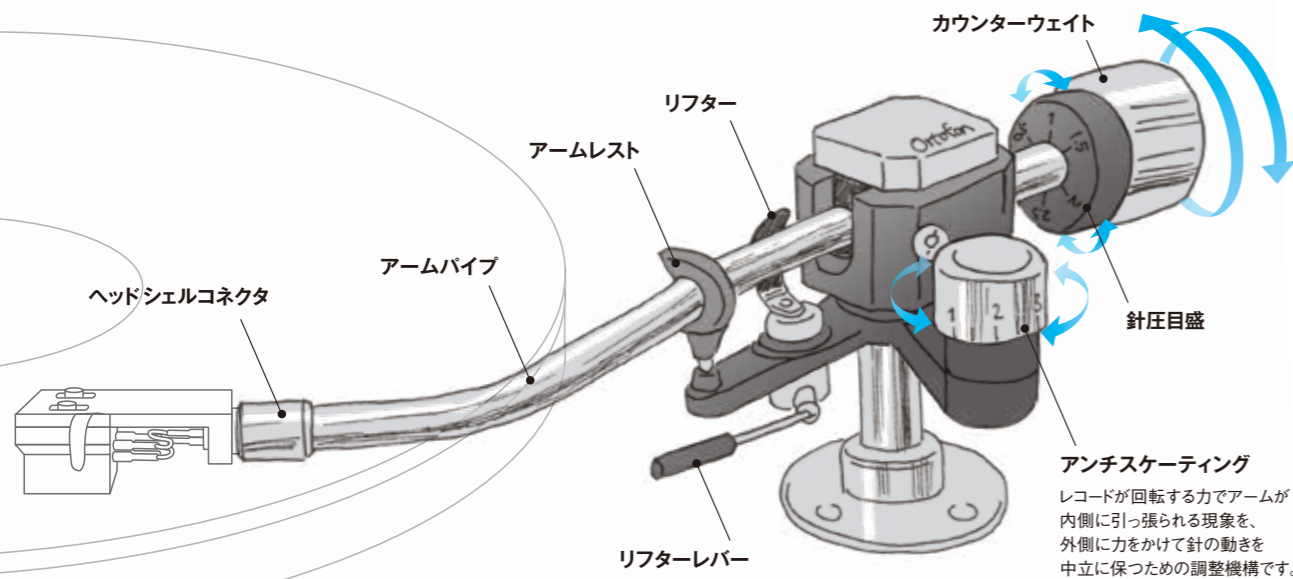
レコード針の針先クリーニングについて

カートリッジ(レコード針)の針先クリーニングの方法についてご紹介しています。



Tonearm —トーンアームの構造と使い方—

トーンアームはカートリッジのバランスを保ち、適切な針圧でレコードの音を正確にトレースする装置です。ウェイトで水平・垂直のバランスを取ります。先端が取り外し可能なユニバーサルアームであれば、好みに応じてカートリッジやヘッドシェルを交換できます。組み合わせや細かい調整でお好みの音を創り上げていけるのも、アナログの大きな魅力のひとつです。



アンチスケーティング
レコードが回転する力でアームが内側に引っ張られる現象を、外側に力をかけて針の動きを中立に保つための調整機構です。

ヘッドシェルコネクタ

ユニバーサルタイプはアーム先端を回すことでカートリッジを簡単に取り外し可能です。音楽に合わせてお好みのセットを楽しむことができます。

リフター

リフターレバーと連動してリフターがアームを上下させます。オイルダンプ機構により、レコード盤を傷つけないようゆっくりと動きます。

カウンターウェイト

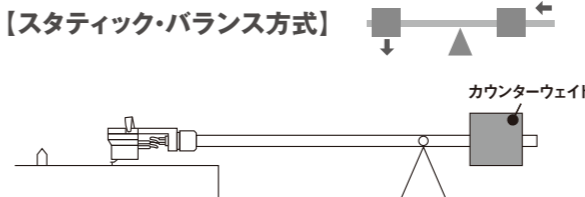
バランスと針圧を調整するためのウェイトです。まず前後の位置を調整してゼロバランスを取ってから、目盛を合わせて針圧をかけていきます。(スタティック・バランス方式の場合)

*ゼロバランス調整とは、針圧をかける前にアームが水平になるようにセットしておく作業です。

トーンアームの種類

トーンアームにはショートアーム、ロングアーム、S字型、J字型、ストレート型などの形状の違いがあるほか、針圧の加圧方式によって、概ねスタティック・バランス方式とダイナミック・バランス方式の2種類に大別できます。

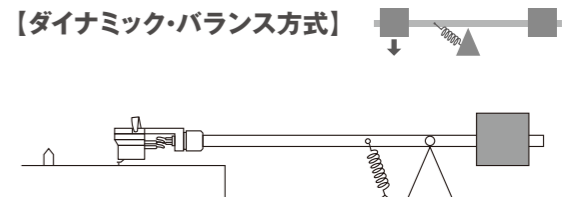
【スタティック・バランス方式】



最もポピュラーなタイプ。針圧調整時はメインウェイトを移動させてゼロバランスを取り、同じウェイトで加圧を行うものが多い。

<該当モデル> AS-212R / AS-309R / AS-212S / AS-309S など

【ダイナミック・バランス方式】

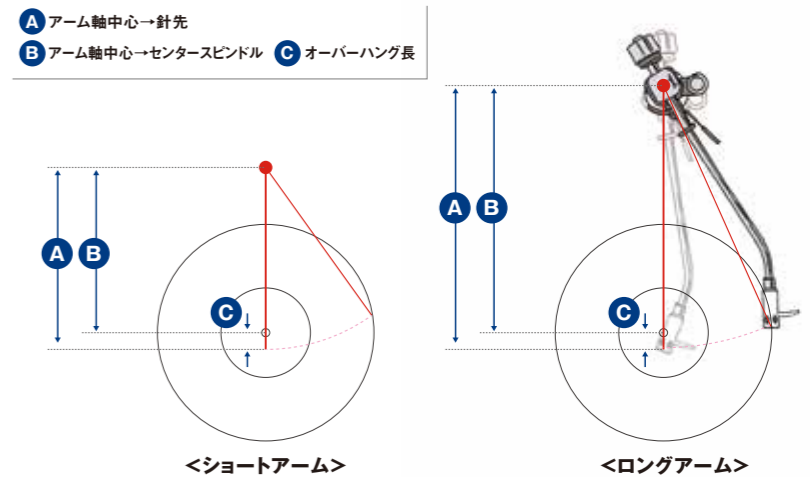


針圧の加圧をバネで行うタイプ。ゼロバランスを取った後、針圧はウェイト移動ではなくバネで圧力をかけることで加圧されます。

<該当モデル> RSG-309(Summit 12) / RS-212D / RS-309D など

トーンアームの動き

カッティングマシンが盤に溝を刻む際は針先が外周から中心に向けて一直線に動きますが、一般的なアームに付けられた針は円弧状に動きます。このためアーム使用時は盤の外周および内周でトラッキングエラーと呼ばれるズレが生じますが、これを抑えるために右図Aの「アーム軸中心→針先」およびBの「アーム軸中心→センタースピンドル」の距離をアームのスペック通りに正しくセットし、Cのオーバーハング長を合わせます。またアームの振り角度を設定し、正しくトレースするようにします。



トーンアームは形状や長さによって音質が変化します。プレーヤーの仕様を確認しながら、カートリッジ、ヘッドシェルと合わせてお好みのアームを選びましょう。

「オルトフォンジャパン公式YouTubeチャンネル」



製品の使用方法やセッティング時の注意点など、アナログ再生に役立つ様々な情報を動画で解説しています。

ダイナミック・バランス型 (ショートアーム)のセッティング方法



ダイナミック・バランス型 (ロングアーム)のセッティング方法



スタティック・バランス型 (ショートアーム)のセッティング方法



スタティック・バランス型 (ロングアーム)のセッティング方法



海老沢 徹 先生のアナログ解説シリーズ

カートリッジとトーンアームの相性について

アナログ研究・技術評論の第一人者

海老沢 徹 氏



1955年東京大学原子核研究所に入所。1961年宝石の精密加工会社に入社、オーディオ技術を担当。15あまりの特許・実用新案を取得している。また、音響技術委員会幹事、スタイラス技術小委員会主査などを歴任。日本工業規格(JIS)においては、カートリッジについての規格制定に関するほとんどの作業に携わった。1984年カートリッジメーカーを設立。代表作に「フォノ・カートリッジ大全」、「現代新・真空管技術事典」、「コリンズ物語—無線通信機のプレステージ」など。他、オーディオ誌、無線電機技術誌への寄稿多数。

MC型針交換／SPUユニット交換／MM型針先(スタイラス)交換 対応一覧表

オルトフォンではMCカートリッジ、MMカートリッジ交換針の修理サポートとして針交換(ユニット交換)、またMM型スタイラス(交換針)の販売を行っております。なお、MCカートリッジ針先のダイヤモンドチップのみの交換は致しておりません。交換価格については右記QRコードよりホームページの最新情報をご確認ください。また、カートリッジの型式名が不明の場合、販売店様に一旦お預けの上、弊社で型式名確認の後にお見積りにてご連絡させていただきます。

※2025年10月現在の対応表となります。予告無く仕様変更、価格変更することがありますのでご了承ください。

※交換機種の記載がない製品に関しては同一機種のユニット交換での対応となります。

● MCカートリッジ針交換に際して

- ・湿式スタイラスクリーナーや、それに類するもの使用は、カンチレバーの破損や腐食、スタイラスチップの脱落や損傷の原因となります。
- ・針交換後のキャンセルは不可となります。
- ・針交換後のユニットは弊社での引取りとなります。
- ・**●印の製品はデンマーク本社工場でのリペア(修理)となりますので、本体お預かり後約40日～の納期がかかります。また、リペアにあたりお客様の同意書が必要となります。**
- ・カートリッジを留めるビスはオルトフォン純正のものをご使用ください。純正以外のものを使用すると破損の原因となります。

● MM型カートリッジの針先(スタイラス)交換に際して

- ・MM型カートリッジの針先(スタイラス)交換は、お客様ご自身での交換作業をお願いしております。針先交換の方法については本ページ下部に記載のQRコードからご参照頂けます。

● SPUシリーズの針交換(ユニット交換)に際して

- ・旧SPU A、AE、G、GEはClassicタイプの針交換(ユニット交換)となります。MkIIタイプの交換も同様です。
- ・SPUシリーズのユニット交換時は、右図の「SPUユニット」部分のみ新品ユニットに交換いたします。ヘッドシェル・取付ネジ・MC昇圧トランス(GTシリーズのみ)、リードワイヤーは交換・保証の対象外となります。
- ・SPUの針交換(ユニット交換)をご依頼の際は必ず針カバーをご装着の上、製品箱に梱包した状態(正規の製品箱がない場合には輸送上安全な荷姿)で販売店様窓口へお預けください。それらが無い状態でお預けいただいた場合は、ご返送時の輸送上の安全を期す為、**有償でのご用意**となりますのであらかじめご了承ください。
- ※1) SPU Gシェル用針カバーについては、旧タイプの針カバー(ボトム全面を覆うタイプ)のご用意は無く、現行タイプのご用意となります。
- ※2) 製品箱については旧来使用していた赤箱はすでにご用意が無く、現行製品に使用されている白箱のご用意となります。また、弊社にてご用意する製品箱は予告なく変更される場合がございます。



■ MC型針(本体)

製品名	交換機種
● The MC Century	
● MC Anna	
● MC Anna Diamond	
MC Xpression	
● MC Windfeld	
MC Windfeld TI	
● MC A90	
● MC A95	
MC A Mono	
MC Verismo	
MC Diamond	
MC 90X	
MC Rohmann	
MC 5000	MC Cadenza Black
MC Jubilee	
MC 3000	
MC Cadenza Black	
MC Kontrapunkt c	MC Cadenza Bronze
MC Cadenza Bronze	
MC 70 Anniversary	
MC Kontrapunkt b/h	MC Cadenza Blue
MC Cadenza Blue	
MC 2000MkII	
MC 2000	MC Cadenza Red
MC Kontrapunkt a	
MC Cadenza Red	
MC Cadenza Mono	
MC ER	
MC 30 シリーズ	MC Q30S
MC 200 シリーズ	※MC Qシリーズへの交換対応は在庫限りでサービス終了 もしくは
MC Q30/MC Q30S	MC X40
HMC30/MC30S/MC30W	
MC X40	※MC Q30Sへの交換は不可
MC 20 シリーズ	
MC 100 シリーズ	MC Q20
SL 20 シリーズ	※MC Qシリーズへの交換対応は在庫限りでサービス終了 もしくは
SL 15 シリーズ	MC X30
MC Q20	
HMC20/MC20S/MC20W	
MC X30	※MC Q20への交換は不可
MC 10 シリーズ	MC Q10
MC Q10	※MC Qシリーズへの交換対応は在庫限りでサービス終了 もしくは
MC 3 Turbo	MC X20
MC X20	※MC Q10への交換は不可
MC 09A	MC Q5
MC 09B	※MC Qシリーズへの交換対応は在庫限りでサービス終了 もしくは
MC Q5	MC X10
MC 1 Turbo	
MC X10	※MC Q5への交換は不可
MC Q Mono	MC Q Mono
	※MC Qシリーズへの交換対応は在庫限りでサービス終了

■ MC型針(ユニット)

製品名	交換機種
SPU A	SPU Classic A
SPU AE	SPU Classic AE
SPU G/SPU GT	SPU Classic G®
SPU GE/SPU GTE	SPU Classic GE®
SPU Gold AE/GE	SPU Royal A/G
SPU Reference A/G	SPU Royal A/G
● SPU Meister AE	
● SPU Meister GE	
SPU Meister S/AE/GE/MkII	
SPU Royal A/G/N	
SPU Royal G MkII	
SPU Classic A	
SPU Classic AE	
SPU Classic G/G MkII	
SPU Classic GE/GE MkII	
SPU Classic GT	
SPU Classic GTE	
SPU Mono A	
SPU Mono G/G MkII	
SPU Wood A	
CA25D/CG25D	旧タイプはユニット交換不可
CA65D/CG65D	旧タイプはユニット交換不可
CA25Di/CG25Di	
CG25Di MkII	
CG65Di/CA65Di	
CG65Di MkII	
● SPU 85 Anniversary	
● SPU 90 Anniversary	
● SPU 95 Anniversary	
● The SPU Century	
SPU Synergy A/G	
SPU Spirit	
SPU#1S	
SPU#1E	
SPU Ethos	
SPU GTE 105	
SPU GTX S	
SPU GTX E	

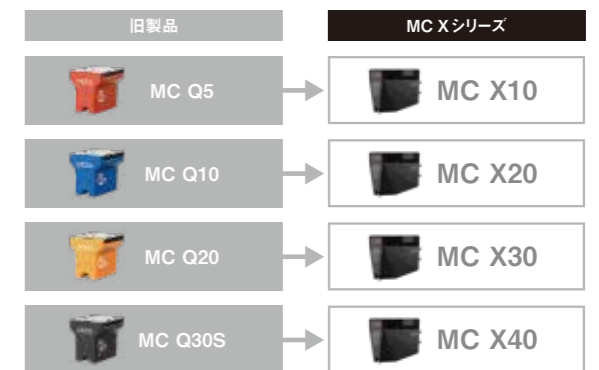
※旧SPU GTおよびSPU GTEのユニット交換に際しては、ユニット部分はSPU Classic GおよびGEへの交換となり、MC昇圧トランスは元のものを再度使用いたします。なお、ご送付頂きましたGTシリーズの昇圧トランスが使用不可の場合はこれを取り外し、トランスなしのSPU Classic GおよびGEとしてご返却させていただきます。

■ MM型交換針

製品名	交換機種
520/520II	Stylus 520/520II
530/530II	Stylus 530/530II
540/540II	Stylus 540/540II
OM D25 M	Stylus D25M
OM 78	Stylus 78
OM 5S/Concorde 5S	Stylus 5S
OM 5E/Super OM 5E/Concorde 5E	もしくは Stylus 5E
2M Red series	Stylus 2M Red JP
2M Blue series	もしくは Stylus 2M Blue JP
2M Bronze series	Stylus 2M Bronze JP
2M Black series	Stylus 2M Black JP
2M Black LVB 250	もしくは Stylus 2M Black LVB 250
2M Mono series	Stylus 2M Mono JP
2M 78 series	もしくは Stylus 2M 78 JP
The Concorde Century	Stylus Century
Concorde 40 Anniversary	Stylus 40 Anniversary
Concorde Music Red	Stylus Concorde Music Red
Concorde Music Blue	Stylus Concorde Music Blue
Concorde Music Bronze	Stylus Concorde Music Bronze
Concorde Music Black	Stylus Concorde Music Black
Concorde Music Black LVB 250	Stylus Concorde Music Black LVB 250

※Concorde Musicシリーズの本体部分は全機種共通につき、同シリーズのRed・Blue・Bronze・Black・Black LVB 250の5機種すべての交換針(Stylus)に交換することができます。

■ MC QシリーズからMC Xシリーズへの針交換対応表



※同一グレードでの針交換対応となります。

■ 各種針交換価格表

交換価格については右記QRコードよりホームページの最新情報をご確認ください。
※QRをお読み頂くと価格表が表示されます。



MC型針交換・SPUユニット交換について

MCカートリッジやSPUシリーズの針交換についてのご説明、またMMカートリッジの針先(スタイラス)交換についての解説および動画をご覧いただけます。針交換時に気になる疑問にお答えしています。

MC型カートリッジの針(ユニット)交換について



SPUシリーズの識別方法



MM型針先(スタイラス)交換について

代表的なMMカートリッジ「2Mシリーズ」を用いた、スタイラス交換についての解説ページと動画です。針先(スタイラス)交換時にお役立てください。

MM型カートリッジの針先(スタイラス)交換について



【動画】2Mシリーズのスタイラス交換手順

